埼玉県入間郡毛呂山町

川角（かわかど）古墳群測量調査報告書

— 14・16・23～30 号墳 —

２０２２

駒澤大学考古学研究室

例　言

1　本書は、埼玉県入間郡毛呂山町大字川角・大類地内に所在する川角古墳群の測量調査報告書である。

2　調査は毛呂山町教育委員会の支援のもと、駒澤大学文学部歴史学科考古学専攻が実施した。

3　調査対象とした古墳は、毛呂山町大字川角地内に所在する川角古墳群 14・16・23～30 号墳である。

4　測量調査の期間は以下の通りである。

2016 年 8 月 9 日～2016 年 8 月 21 日　2017 年 3 月 2 日～2017 年 3 月 10 日

2017 年 8 月 8 日～2017 年 8 月 20 日　2018 年 3 月 6 日～2018 年 3 月 10 日

2018 年 8 月 14 日～2018 年 8 月 23 日　2021 年 7 月 6 日～2021 年 7 月 11 日

2021 年 10 月 5 日～2021 年 10 月 10 日

5　整理等作業・報告書刊行作業は 2021 年 10 月 20 日から 2022 年 4 月 30 日まで駒澤大学考古学研究室で実施し、作業には同大学の考古学研究会生があたった。

6　本書の編集は、駒澤大学文学部の寺前直人、角道亮介、藤野一之の指導の下、間優人、金子健人、寺西良騎、野島大和、吉田公太郎が行った。

7　本書の執筆者は目次内に( )で記した。

8　測量調査費ならびに印刷製本費は、駒澤大学考古学専攻実験実習費を使用した。

9　本書にかかる図面は駒澤大学考古学研究室、遺物は毛呂山町教育委員会で保管する予定である。

10　本書の作成にあたり、次の方々のご協力を賜った。記して感謝いたします(敬称略・五十音順)。

栗田博　小室孝　小室紘一　酒井清治　髙沢佳弘　平野寛之　毛呂山町教育委員会　毛呂山町歴史民俗資料館

11　陶器は酒井清治氏に、かわらけは平野寛之氏から多大なご教示を賜った。記して感謝いたします。

凡　例

1　本書で示す方位はすべて座標北であり、座標は世界測地系、水平基準は海抜高(m)である。

2　本書掲載図の第 2 図は、国土地理院発行 1/25000 地形図『越生』、第 3 図は毛呂山町都市計画図 1/2500 をそれぞれ使用した。

3　遺構図および遺物図の掲載縮尺は以下の通りである。

墳丘測量図 1/200、遺物実測図 1/3 で作図した。

4　等高線図は 20 ㎝間隔で作図した。

5　土器の実測方法は、比較的残存状況のよいものは 4 分割法を用い、口径を算出できたものは一部回転復元し中心線を一点鎖線で示した。また、残存状況が良好でないものは断面図と内外図の拓本を掲載した。

6　法量の単位はすべて㎝であり、推定の場合は( )付で記した。

7　遺物の色調は、新版『標準土色帖』(2005 年版)による。

目　次

例　言
凡　例
目　次

第 1 章　調査の経過と概要(寺前)……1
第 2 章　遺跡の立地と環境……3
　第 1 節　地理的環境(谷山)……3
　第 2 節　歴史的環境(寺西)……4
　(1)古墳時代前期から中期前半……4
　(2)古墳時代中期後半から後期……4
　(3)古墳時代終末期……5
第 3 章　川角古墳群の概観……8
　第 1 節　概要(ピエトラシキエヴィチ)……8
　第 2 節　既往の調査(間)……9
第 4 章　測量調査成果……10
　第 1 節　調査の方法(間)……10
　第 2 節　測量調査の所見……13
　(1)14 号墳(米原)……13
　(2)16 号墳(松尾)……14
　(3)23 号墳(金子)……14
　(4)24 号墳(野島)……15
　(5)25 号墳(寺西)……17
　(6)26 号墳(神田)……18
　(7)27 号墳(森崎)……19
　(8)28 号墳(間)……19
　(9)29 号墳(米原)……20
　(10)30 号墳(春日)……21
　(11)遺構外表採遺物(間)……21
　第 3 節　川角古墳群表採遺物にかんする所見
　　(藤野)……21
　(1)表採遺物の概要……21
　(2)まとめ……22
第 5 章　総括(間)……24
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　川角古墳群位置図……3
第 2 図　古墳時代の周辺遺跡分布図……6
第 3 図　川角古墳群分布図……8
第 4 図　座標路線図……10
第 5 図　川角古墳群地形測量図……12
第 6 図　14 号墳測量図 ……13
第 7 図　14 号墳表採遺物 ……13
第 8 図　16 号墳測量図 ……14
第 9 図　23 号墳測量図 ……14
第 10 図　24 号墳測量図及び遺物表採位置 ‥15
第 11 図　24 号墳表採遺物 ……16
第 12 図　25 号墳測量図 ……17
第 13 図　25 号墳遺物表採位置及び表採遺物 17
第 14 図　26 号墳測量図及び表採遺物 ……18
第 15 図　27 号墳測量図 ……19
第 16 図　28 号墳測量図 ……19
第 17 図　28 号墳遺物表採位置及び表採遺物 20
第 18 図　29 号墳測量図 ……20
第 19 図　30 号墳測量図 ……21
第 20 図　遺構外表採遺物……21
第 21 図　26 号墳表採須恵器と関連資料 ‥‥23

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡一覧……7
第 2 表　川角古墳群測量基準点一覧……11
第 3 表　14 号墳表採遺物観察表 ……13
第 4 表　24 号墳表採遺物観察表 ……16
第 5 表　25 号墳表採遺物観察表 ……17
第 6 表　26 号墳表採遺物観察表 ……18
第 7 表　28 号墳表採遺物観察表 ……20
第 8 表　遺構外表採遺物観察表……21

写　真　図　版　目　次

PL. 1　調査範囲遠景(南東から)

PL. 2　1. 14 号墳(右)・16 号墳(左)(南から)

2. 25 号墳(奥)・26 号墳(中央)・27 号墳(前)

PL. 3　1. 14 号墳全景(北から)

2. 14 号墳墳丘南東斜面(南東から)

3. 14 号墳墳頂部緑泥片岩確認状況(東から)

4. 16 号墳全景(東から)

5. 16 号墳墳丘北斜面(北から)

6. 23 号墳全景(南から)

7. 23 号墳墳丘北斜面(北西から)

8. 作業風景

PL. 4　1. 24 全景(北西から)

2. 24 号墳墳丘南西斜面(西から)

3. 24 号墳墳丘南西斜面(南西から)

4. 25 号墳全景(東から)

5. 25 号墳墳頂部貼石確認状況(西から)

6. 26 号墳全景(西から)

7. 26 号墳墳頂部貼石確認状況(北から)

8. 作業風景

PL. 5　1. 27 号墳全景(東から)

2. 27 号墳北斜面(北から)

3. 28 号墳全景(南から

4. 28 号墳墳頂部貼石確認状況(東から)

5. 29 号墳全景(北から)

6. 29 号墳墳頂部貼石確認状況(北から)

7. 30 号墳全景(北東から)

8. 30 号墳墳丘南西斜面(西から)

PL. 6　1. 14 号墳表採遺物

2. 24 号墳表採遺物(1)

PL. 7　1. 24 号墳表採遺物(2)

2. 25 号墳表採遺物

3. 遺構外表採遺物

4. 26 号墳表採遺物

5. 28 号墳表採遺物

第 1 章　調査の経過と概要

川角古墳群は、埼玉県毛呂山町大字川角・大類に所在する古墳群である。現地の大部分は林となっている。古墳群を鎌倉街道が横断しており、また中世寺院である崇徳寺跡も古墳群と重複している。さらに、鎌倉街道の越辺川渡河点に設置された「苦林宿」に比定される堂山下遺跡にも接する。

川角古墳群における発掘調査は、後述するように 1960 年に実施された 15 号墳を嚆矢とし、その後も城西大学や毛呂山町教育委員会によって断続的に調査が実施されてきた。また、1980 年代には分布調査が実施され、38 基の墳丘が確認されている。さらに、2007 年には航空レーザー測量が試験的に実施され、新たに古墳状の高まりが 5 箇所確認されており、その 2 基については発掘調査が実施された結果、古墳であることが確定された(毛呂山町教育委員会 2016)。以上の調査から、現段階では合計 40 基の古墳が把握されている。しかしながら、古墳群全体を対象とした詳細な測量調査はこれまで実施されていなかった。

このような状況を受けて、駒澤大学考古学研究室は、毛呂山町教育委員会との協議のうえ、各古墳の残存状況の把握とそれぞれの古墳の位置的関係を明らかにするために測量調査を計画し、第 1 回の 2016 年 8 月 9 日(～ 8 月 21 日)から現地での調査に着手した。調査は以下の 7 回にわたった。

第 1 回　2016 年 8 月 9 日～ 8 月 21 日

調査参加者　大岩岳晃、小林慶音、長澤文彩(以上、駒澤大学大学院生)、安部美佑、秋葉峻佑、石井薫、泉谷早耶、伊野光一、岩持壮彦、江藤眞琴、長田遥、垣谷康平、片島みなみ、栢森洋輔、川本ゆりか、觀世葵、熊谷樹、熊崎夢、黒田陽奈子、小林拓朗、小針海沙莉、佐柄雄斗、佐藤優衣、澤田紳司、宍戸睦、島田将大、島田日向子、下山祐和、杉山敬太、鈴木祥、鈴木天享、鈴本翔哉、須永開地、関口真帆、髙橋岳大、多田宏太、田中悠哉、田村咲希、土屋響名、角田祥一、内藤亜希、中田茉那、中村巧、並木美紅、野口壮一郎、長谷川蓮、濱田圭太、藤井亮暢、古川遼平、牧桜子、間瀬貫太、眞鍋有希乃、宮島亜論、向川涼香、山田望乃、米倉暁、和田大樹、渡邊樹(以上、実習生)

第 2 回　2017 年 3 月 2 日～ 3 月 10 日

調査参加者　大岩岳晃、小林慶音、長澤文彩(以上、駒澤大学大学院生)、安藤創、飯島加奈、泉谷早耶、市村綾伽、内海史郎、大熊雅弘、小笠原理帆、迫田睦生、宍戸睦、島田日向子、杉山敬太、高橋岳大、多田宏太、田中媛子、田中悠哉、田村咲希、角田祥一、古川遼平、森本司(以上、実習生)

第 3 回　2017 年 8 月 8 日～ 8 月 20 日

調査参加者　北山直人、森本司(以上、駒澤大学大学院生)、網代志保、阿部力也、安藤創、安藤悠人、飯島加菜、五十嵐真咲、伊狩まゆ、市村綾伽、上原史也、大原崇寛、岡田梢、小島美咲、加藤夏海、金田玲奈、日下裕貴、崎濱莉未、迫田睦生、佐々木徳文、澤田陽加、杉本菜帆、鈴木理沙、孫瑋誉、髙田彰太朗、竹氏彩華、田中俊輔、田中媛子、田並和也、土田良太、常田晃平、中西夏美、西畑泉紅、濱中諒太朗、浜辺直人、坂東康平、引地美優、福田茜、三浦柚、宮崎澪菜、栁瀬かおり、山下郁弥、涌井創(以上、実習生)

第 4 回　2018 年 3 月 6 日～ 3 月 10 日

調査参加者　生野一志、竹田夏海、田中健(以上、駒澤大学大学院生)、安藤創、市村綾伽、上山敦史、及川響、黒澤諒、迫田睦生、志賀晃貴、鈴木里佳、髙木華音、瀧本美佳、多田宏太、田中媛子、津田

富夢、長谷川文雄、長谷川美紀(以上、実習生)

第 5 回　2018 年 8 月 14 日～ 8 月 23 日

調査参加者　生野一志、鈴木崇司、畑美由起(以上、駒澤大学大学院生)、阿部汐里、岩切温子、上山敦史、遠藤菜月、及川響、王珏、岡﨑里砂、加藤彩芽、加藤美緒、香中一郎、河耀太、河野桂樹、木太瑞紀、木村直樹、黒澤諒、小池琳久、小牧亮介、酒井善行、坂本朔、佐々木悠介、志賀晃貴、鈴木駿、鈴木里佳、髙木華音、瀧本美佳、田中健太郎、津田富夢、長谷川文雄、長谷川美紀、樋口美咲、藤田紗久ら、本橋亮、守川季輝、山中雄介、渡邊麻友(以上、実習生)

第 6 回　2021 年 7 月 6 日～ 7 月 11 日

調査参加者　上山敦史、王珏、黒澤諒、胡九六、周丹青、津田富夢(以上、駒澤大学大学院生)、間優人、淡田陽子、稲垣瑛莉華、市川紗椰、伊藤奏子、内堀彩音、大坂瑠偉、加園美波、金子健人、亀井春来、川浦望、神田華絵、小島梨里花、小林篤生、小守諒、佐藤悠宇、志賀楓夢、渋川絵美里、神宮朱里、菅谷優花、鈴木理紗、巣瀬健斗、田中麻里子、谷山優奈、辻龍成、寺西良騎、鳥居愛莉、永井優海、中島彩、野島大和、萩原唯人、ピエトラシキエヴィチレナ、藤澤理奈、松尾もも、三澤怜、宮下穂香、村田実奈美、森崎祐以、山田真路、結城偉翔、吉田公太郎、米原光咲(以上、実習生)

第 7 回　2021 年 10 月 5 日～ 10 月 10 日

調査参加者　上山敦史、王珏、黒澤諒、胡九六、周丹青、津田富夢(以上、駒澤大学大学院生)、間優人、宇佐美周馬、春日優希、金子健人、川口秀太、神田華絵、許心蕾、小針翔太、佐藤梨華、鈴木航平、妹尾風花、関彰人、千田暉、田中優作、田丸亜美、寺西良騎、長原梨英、永山朋果、成川桃子、野島大和、能登谷錬、潘怡卿、廣瀬梓、福田有希、増澤はな、町田遼、松尾もも、村井なぎさ、茂出木貴弘、森崎祐以、吉田公太郎、米原光咲(以上、実習生)

整理作業・報告書刊行作業　2021 年 10 月 20 日～ 2022 年 4 月 30 日

整理等作業参加者　間優人、淡田陽子、井田樹希、大坂瑠偉、春日優希、金子健人、神田華絵、小林義弘、辻龍成、寺西良騎、永井優海、野島大和、ピエトラシキエヴィチレナ、廣瀬梓、福田有希、松尾もも、村田実奈美、森崎祐以、吉田公太郎、米原光咲(以上、駒澤大学研究会生)

調査には、第 1 回から第 5 回の調査については、駒澤大学の教員である酒井清治、寺前直人、角道亮介が現地での測量調査を指導し、駒澤大学大学院所属の大学院生と文学部歴史学科考古学専攻の学生が参加した。また、考古学研究会所属の学生がこれを補助した。第 6・7 回については駒澤大学教員の寺前直人、角道亮介、藤野一之が現地での指導を行った。参加学生は第 5 回までと同一の体制であった。なお、2019 年度は近接する大類古墳群の測量調査を実施している。2020 年に予定していた調査は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の大流行を受けて、延期せざるをえない状況であった。2021 年度についても度々の延期を重ねたが、関係各位の努力とご理解のもと、入念な感染症対策を講じたうえで夏期と秋期に測量調査が実施することができたのは、学生にとっても教員にとっても大きな喜びであった。

調査にあたっては、毛呂山町教育委員会から全般的な指導と機材と場所の提供をいただいたほか、調査を来訪された諸賢からも有益なご教示を賜った。また、地元の地権者をはじめ近隣住民の方々からは、地域における調査に関してご理解と格別のご協力をいただいた。このほかにも多くの方々の支えを得て、調査が完了できたことをここに記し、感謝の意を示したい。

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境（第１図）

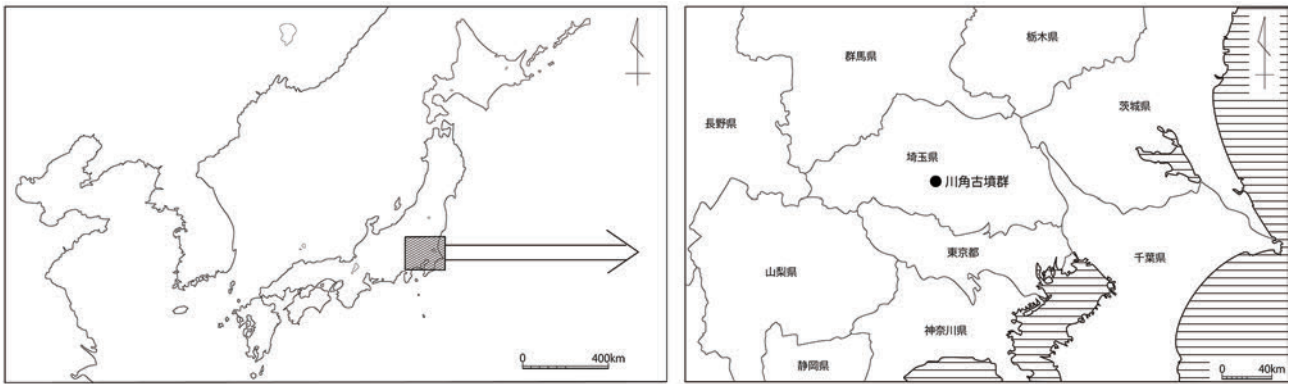
川角古墳群は、東武越生線武州長瀬駅の北東 2.3㎞の埼玉県入間郡毛呂山町大字川角・大類地内に所在する。毛呂山町は埼玉県南西部、関東山地と関東平野の接点に位置しており、周辺の地形は低地・自然堤防・台地・丘陵・山地に大きく分けられ、町域の多くは台地・丘陵・山地で占められているため、起伏のある地形となっている。

町域の北部は、東流する越辺川によって形成された低地が広がる。また、南部の丘陵地帯から流れ坂戸市内で高麗川と合流する葛川流域にも、帯状に長く低地が形成されている。

町域の東側を占めている毛呂台地は、越辺川と毛呂川、そして大谷木川等によって形成された古い扇状地状の堆積物で構成され、表面は関東ローム層が堆積している。毛呂台地の標高は、北東端で約 30 ｍ、西側で約 60 ｍを測る。この毛呂台地は、坂戸台地・飯能台地とともに扇状地性の台地である入間台地の一部に属している。なお、この入間台地は武蔵野台地の一部で、古い多摩川の作った扇状地が柳瀬川以北を形成している。

丘陵は、町域の北部と南部に位置し北部は越辺川左岸の岩殿丘陵（比企南丘陵、物見山丘陵とも呼称）、南部は毛呂山丘陵と呼ばれている。岩殿丘陵の末端部は標高 50 ｍ～100 ｍの尾根が幾筋かに分かれ突出し、これらは礫層、砂岩、泥岩、そして凝灰岩等から成る新生代第三紀層（都幾川層群）の比較的堅く安定した地盤で構成され、その上に物見山礫層が厚く堆積する。毛呂山丘陵は、東側に延びてゆくと、その東端は坂戸市大字多和目の城山付近に達し日高市境から東側に突出する。この毛呂山丘陵は小さく、地層的には厚い更新世の飯能礫層からなっているため、粘土層をはさんだ礫層が主体となって構成され、その礫層の上部には多摩ローム層が薄く堆積していると考えられている。

町域の６割を占める標高 200 ｍ～400 ｍほどの山地は、外秩父山地の東縁にあたり、山地内部は越辺川の支流である毛呂川・阿諏訪川・大谷木川、そして高麗川の支流である宿谷川によって開析されている。



第１図　川角古墳群位置図

第 2 節　歴史的環境（第 2 図）

以下、本書において報告する川角古墳群に関連する古墳時代の主要な遺跡について、毛呂山町周辺の遺跡を中心に記す。

(1)古墳時代前期から中期前半

当地域では、弥生時代後期の遺跡は少ない一方、古墳時代前期には遺跡数が増加するため、この時期になり低地の開発が行われたと考えられるが、中期前半になると遺跡数は激減する。

集落　毛呂台地周辺では、台地縁辺の三福寺遺跡(8)や大河原遺跡(9)、長岡遺跡(10)などで集落が形成される一方、中耕遺跡(11)や稲荷前遺跡(12)では墓域を含む集落が検出されており、集落の全体像が把握できる例として重要視されている。越辺川右岸の低位段丘面に位置する堂山下遺跡(1)では、前期の住居跡が数件確認されている。左岸の糀谷遺跡(22)においても集落が検出されているほか、松の外遺跡(2)でも住居跡の一部が検出されている。また高麗川流域では、まま上遺跡(3)において住居跡が 1 軒検出されている。

古墳時代前期に形成された集落は、中期前半になると衰退し毛呂山町周辺では葛川沿いの微高地に位置する矢島遺跡(4)や岩殿丘陵東端の駒堀遺跡など限定的になるのが特徴である。矢島遺跡では 16 軒の住居跡が検出されていることに加え、土師器も多く出土しているため前期と中期後半を埋める重要な遺跡である。毛呂台地に限らず、高坂台地や坂戸台地などでも古墳時代前期には集落が多く形成されている一方、古墳時代中期前半には極めて散在的・単発的な集落形成となっており対照的な様相である。

墳墓　古墳時代前期における当地域では、台地縁辺に集落が低地に墓域という土地利用が看取できる。毛呂台地や坂戸台地の墓制は、弥生時代以来の方形周溝墓を採用しており、毛呂台地では中耕遺跡や広面 B 遺跡(13)のほか、稲荷前遺跡では大規模な方形周溝墓群が確認されている。方形周溝墓群は、周溝が全周する大型のものや前方後円形周溝墓を核として四隅が切れる方形周溝墓が分布する。四隅が切れる方形周溝墓は、弥生時代中期に盛行するものであり古墳時代まで残ることは地域性として捉えられる。

(2)古墳時代中期後半から後期

古墳時代中期後半以降になると、再び集落や墓域が形成されるようになる。毛呂山町域では、集落の調査事例は少ないものの造墓エリアとして河川流域の土地利用が活発であることが知られている。

集落　毛呂台地周辺において、古墳時代中期後半頃から出現する集落としては、桑原遺跡(14)や棚田遺跡(15)が存在するが短期間で終焉を迎え古代まで続かない。越辺川以北の地域では、都幾川流域の低地に位置する城敷遺跡で大規模な集落が形成されるほか、岩殿丘陵の先端に立地する舞台遺跡でも集落が確認できる。

古墳時代後期になると、集落は増加傾向にあり毛呂山町域では越辺川左岸に位置する久根下遺跡(5)や高麗川流域の上殿遺跡(6)、高麗川と葛川に挟まれた台地北縁上の常楽寺跡(7)でも住居跡が数件確認されている。また、毛呂台地周辺では西浦遺跡(16)や塚の越遺跡(17)、長岡遺跡などの台地周辺や低地の沼端遺跡(18)などで集落が認められ、長岡遺跡は南に位置する塚原古墳群(L)と大類古墳群(A)と同時期に展開する集落である。

古墳　毛呂台地や坂戸台地では、古墳時代中期後半から群集墳の展開が認められる。

中期後半から古墳の築造が開始される群集墳は、毛呂台地では三福寺古墳群(G)や隣接する善能寺

古墳群(H)、大河原古墳群(I)などが挙げられる。これらの群集墳は、すべて円墳で構成され前方後円墳の築造は認められていない。善能寺古墳群からは、Bc 種ヨコハケの円筒埴輪が、大河原古墳群では TK208 型式期の須恵器甕が出土している。また、大河原古墳群では埴輪の樹立は認められず、古墳群によって異なる様相が認められる。坂戸台地においては、牛塚山古墳群や浅羽野古墳群(J)において古墳の築造が始まるが、毛呂台地と比較すると古墳数は少ない。毛呂台地・坂戸台地では、いわゆる初期群集墳は形成されるものの、中期後半に位置づけられる前方後円墳は確認されていないのが特徴である。

古墳時代後期になると、三福寺古墳群では中期に引き続き古墳が築造されるほか、北峰古墳群(K)や苦林古墳群で新たに古墳の築造が開始される。苦林古墳群は、毛呂山町域の大類古墳群と坂戸市域の塚原古墳群を合わせた総称であり、行政区域によって名称が異なっているが本来的には一体的な古墳群として捉えられる。大類古墳群は、越辺川右岸の台地北縁部に位置しており、40 基の円墳と 2 基の前方後円墳が確認されている。塚原古墳群と合わせると合計 5 基の前方後円墳が存在しており埼玉県内でも稀な小型前方後円墳の密集地帯となっている。坂戸台地では雷電塚古墳群、勝呂古墳群、新町古墳群などで群集墳が形成されており、前方後円墳は雷電塚古墳群や新町古墳群などで 1 基ずつ確認されている。

当該期の古墳は、埴輪を樹立することが多く円筒埴輪をはじめ、人物埴輪や馬形埴輪などの形象埴輪の出土も認められる。雷電塚古墳群や北峰古墳群では、東松山市桜山窯跡群で生産された埴輪が供給されており、大類古墳群では鴻巣市生出塚窯跡産の可能性がある円筒埴輪が出土している。

(3)古墳時代終末期

集落　古墳時代終末期では、稲荷前遺跡や足洗遺跡(19)、金井遺跡(20)、長岡遺跡を中心に集落が展開し、古代にかけて連綿と続くのが特徴である。越辺川左岸では、天神台遺跡(22)で 7 世紀後半の小規模な集落が出現し、久根下遺跡においても当該期の住居跡が検出されている。下田遺跡(21)も 7 世紀前後から出現する集落であるが、8 世紀前半には終焉するようである。

墳墓　毛呂台地や坂戸台地では横穴式石室の採用時期は判然としないが、終末期になると普及するようである。毛呂台地では、北峰古墳群や苦林古墳群において古墳の築造が継続し、大河原古墳群においても築造が再開される。また、成願寺古墳群(M)や川角古墳群(B)では古墳時代終末期になり古墳の築造が開始される。このほか、川角古墳群に近接する宿浦遺跡(C)1 号墳では海綿骨針化石を多量に含む須恵器が出土しており、川角古墳群の南側に位置する苗木原遺跡(D)では石室状の石組遺構から鉄刀が出土したとされる。

当該期の大型古墳については、毛呂台地周辺では成願寺古墳群内の石神神社古墳(N)や浅羽野古墳群内の土屋神社古墳(O)があげられ、いずれも直径 50 m程度の円墳であることが確認されている。坂戸台地周辺には、大型円墳の勝呂神社古墳や小堤山神古墳、一辺 50 m程度の方墳である新山 2 号墳や鶴ヶ丘稲荷神社古墳、上円下方墳の山王塚古墳などが存在しており、入間地域北部に大型古墳が密集している状況が看取できる。

古墳時代後期まで墳墓の築造が僅かであった岩殿丘陵では、南向き斜面に十郎横穴墓群(P)が築かれており、3 号横穴墓は複室構造を持つ横穴墓であることが明らかになっている。また丘陵内では追ヶ谷戸遺跡(Q)において横穴式石室を有する小円墳が単独で存在する。また毛呂山町域では鎌倉道遺跡(E)、西戸古墳群(F)2 号墳など 8 世紀まで追葬が行われていた古墳が確認されている。

第２図　古墳時代の周辺遺跡分布図

第 1 表　周辺遺跡一覧

No.	遺跡名
1	堂山下遺跡
2	松の外遺跡
3	まま上遺跡
4	矢島遺跡
5	久根下遺跡
6	上殿遺跡
7	常楽寺跡
8	三福寺遺跡
9	大河原遺跡
10	長岡遺跡
11	中耕遺跡

No.	遺跡名
12	稲荷前遺跡
13	広面 B 遺跡
14	桑原遺跡
15	棚田遺跡
16	西浦遺跡
17	塚の越遺跡
18	沼端遺跡
19	足洗遺跡
20	金井遺跡
21	下田遺跡
22	糀谷遺跡

No.	遺跡名
23	天神台遺跡
24	小用廃寺
A	大類古墳群
B	川角古墳群
C	宿浦遺跡
D	苗木原遺跡
E	鎌倉道遺跡
F	西戸古墳群
G	三福寺古墳群
H	善能寺古墳群
I	大河原古墳群

No.	遺跡名
J	浅羽野古墳群
K	北峰古墳群
L	塚原古墳群
M	成願寺古墳群
N	石上神社古墳
O	土屋神社古墳
P	十郎横穴墓群
Q	追ヶ谷戸遺跡
ア	小用窯跡
イ	石田窯跡
ウ	赤沼古代瓦窯跡

寺院　越辺川左岸の毛呂台地では、7 世紀末の創建とされている小用廃寺(24)が存在する。小用廃寺は、西戸古墳群の北東約 1 ㎞先という距離に位置することから、小用廃寺の創建に西戸古墳群を造営した勢力が関わったとも推測されている(鳩山町 2006)。坂戸台地北縁においても、勝呂廃寺が創建されるため毛呂台地や坂戸台地において 7 世紀後半から寺院の造営が開始されることが分かる。

窯業　後期に引き続き、岩殿丘陵を中心として窯業生産が行われており、丘陵の東端において根平遺跡、舞台遺跡 C-1・2 号窯跡にて須恵器生産が行われるが、単発的な操業であった可能性が指摘されている。また、岩殿丘陵南端には 7 世紀前半頃に位置づけられる小用窯跡(ア)が存在したとされているが、詳細は不明である。

7 世紀後半には、岩殿丘陵内部に窯跡が成立し丘陵東側から内部へと中心が移行する。当該期に操業が始まる窯として、石田窯跡(イ)、赤沼古代瓦窯跡(ウ)があげられ、勝呂廃寺や小用廃寺へ瓦が供給されている。窯の分布域は 8 世紀以降丘陵内部へ拡大しその規模は東日本最大級となり、現在ではこの一帯の窯跡群は南比企窯跡群と呼ばれている。

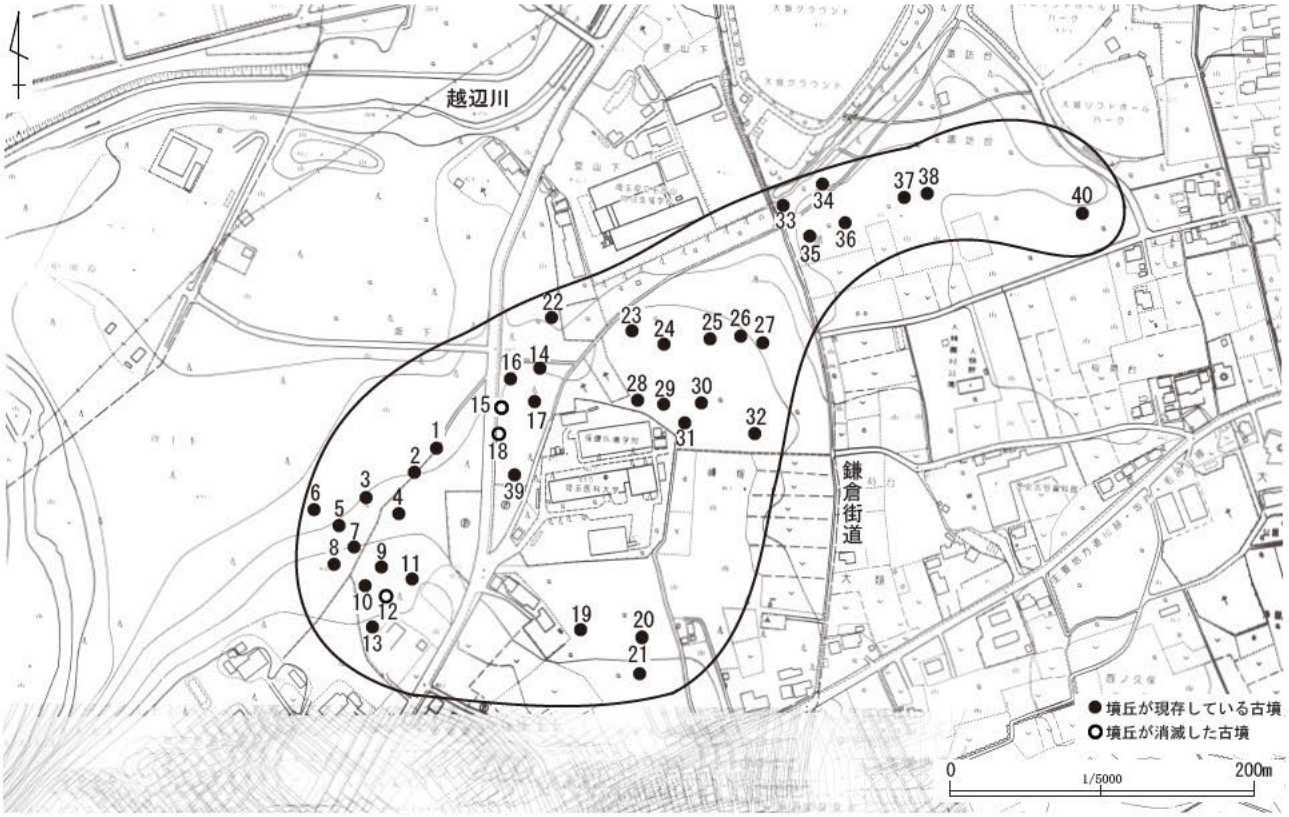
第 3 章　川角古墳群の概観

第 1 節　概要（第 3 図）

川角古墳群は、毛呂山町北東部の毛呂台地縁辺に位置し、標高は 41～48 mを測る。これまでの調査によって、40 基の円墳からなる古墳時代終末期の群集墳と考えられており、墳丘規模はいずれも直径 20 m以下である。

古墳は東西 500 m、南北 300 mの範囲に分布しており、分布域のほとんどが山林のため、開発による破壊も少なく大部分の古墳は墳丘が現存しているのが特徴であるが、12 号墳は墳丘が消滅している。また、15・18 号墳は発掘調査後の開発により墳丘が削平され、現在は町道となっている。古墳は、1～13 号墳、14～18・22・39 号墳、19～21 号墳、23～32 号墳、33～38・40 号墳の大きく 5 つのまとまりが確認でき、今回測量調査の対象とした 14・16・23～30 号墳の 10 基は、古墳群の中央部に位置する。26・27 号墳の北側は、傾斜が緩やかな地形となるが、この場所には現状では墳丘状の高まりは認められない。また、23 号墳の北側は急傾斜となり、その下は平坦面となっているため、古墳築造後に人為的に削平された可能性がある。埋葬施設の構造が分かる古墳は少ないが 15 号墳などでは玄室が胴張りをもつ河原石積の横穴式石室を採用している。また、多くの古墳において墳丘に貼石が確認できるが、埴輪の樹立は認められないといった共通性がある。

なお、22 号墳の周辺に位置する崇徳寺跡では中世の墓域が展開し、これまでの発掘調査によって板碑や蔵骨器が出土しているほか、27 号墳の東側には鎌倉街道が南北に縦貫し、23 号墳の北側には鎌倉街道沿いの宿と推定される堂山下遺跡が位置する。また 15 号墳からは南北朝時代の板碑、18 号



第 3 図　川角古墳群分布図

墳からも中世の陶器が出土していることから、古墳が中世の段階に墓域として利用されていたと考えられる。

第 2 節　既往の調査

今回の調査成果の前に、川角古墳群における既往の調査についてまとめる。

川角古墳群で行われた初めての発掘調査は、1960 年に実施された毛呂山町教育委員会による 15 号墳の発掘調査である。墳丘の 2/3 ほどが発掘され、南北 9.6 m、東西 7.0 m、高さ 2.2 mの円墳で埋葬施設は胴張りをもつ横穴式石室であることが確認された。出土した須恵器の形態的特徴から 7 世紀以降の築造と考えられている(田中 1960)。

1965 年には、城西大学学術研究室によって、6 号墳(吹上古墳)の発掘調査が行われた。この調査によって、6 号墳も円墳で埋葬施設は胴張りをもつ横穴式石室であることが確認された。遺物は金銅製耳環、土師器坏、須恵器短頸壺が出土している(城西大学 1987)。

1984 年から 1986 年にかけては、毛呂山町教育委員会によって毛呂山町内の遺跡分布調査が行われ、川角古墳群において当時認識されていた 38 基の古墳の現状の確認が行われた(毛呂山町教育委員会 1985)。

2003 年には、毛呂山町教育委員会によって、15・18 号墳の発掘調査が行われた。15 号墳の発掘調査は、1960 年における発掘調査の際に調査区外であった墳丘を対象としたものであり、周溝が確認されたほか、墳丘上ならびに周溝内から須恵器のほか、板碑や陶器が出土した。18 号墳は周溝のほか、横穴式石室の壁面がわずかに残存していることが確認された。横穴式石室の主軸方向は南北軸と推定され、確認された横穴式石室の残存部分は東側壁にあたる。遺物は、須恵器のほかに陶器が出土した(毛呂山町教育委員会 2014)。

2007 年には、東京電機大学と朝日航洋株式会社によって、航空レーザー測量の技術を応用した分布調査が行われた。これにより、以前から認識されていた 38 基の墳丘に加えて、新たに 39・40 号墳を含む 5 基の墳丘状の地形が確認された。調査結果を受けて、毛呂山町教育委員会は 39・40 号墳の範囲内容確認調査の実施を決定した。

39 号墳は高さ 0.4 mと低い墳丘であり、発掘調査によって周溝が確認された。また墳頂部に礫が集められている状況が検出されたことから、中世において墓域として利用されたと考えられている。

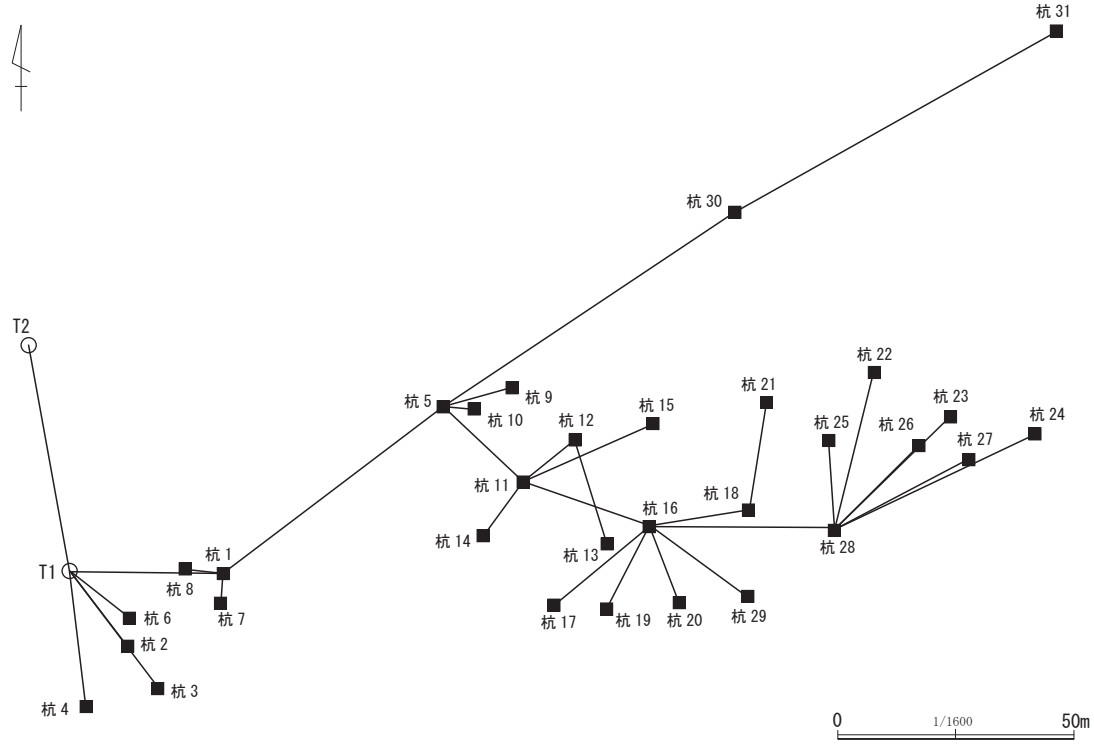
40 号墳は、従来の川角古墳群分布域から外れた場所に立地しており、発掘調査が行われた。発掘調査の結果、周溝が確認された。遺物は須恵器無蓋高坏や甕が出土しており、6 世末から 7 世紀初頭に位置付けられている(毛呂山町教育委員会 2016)。

第 4 章　測量調査成果

第 1 節　調査の方法(第 4・5 図、第 2 表)

測量原点は、毛呂山町が設置した T1(x=-4731.319、y=-44314.902)と T2(x=-4683.501、y=-44323.602)を基準とした(第 4 図)。この 2 点から開放トラバースにより、測量基準点を任意に設置し、光波測量機と平板を用いて、20cm 間隔の等高線図を作成した(第 5 図)。標高は、T1 の標高 45.449 mを利用し、オートレベルを用いて測定した。

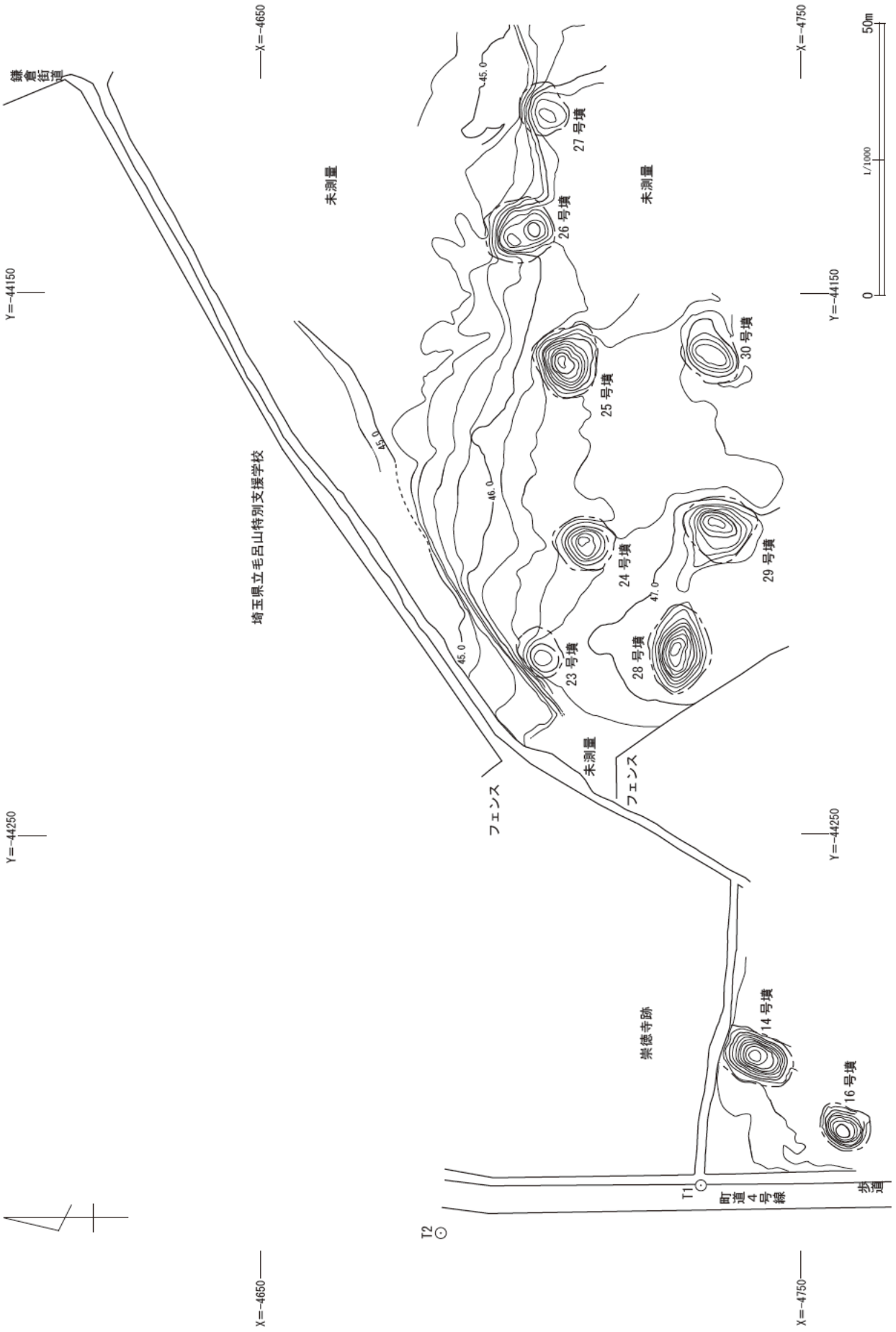
製図にあたり、残存する墳丘の傾斜変換点を墳裾とし一点鎖線で示した。また、現状の墳丘の高さは、先述した墳丘の傾斜変換点の標高と、墳頂部の標高との最大の比高差を算出したものである。



第 4 図　座標路線図

第 2 表　川角古墳群測量基準点一覧

3 級基準点							
点名	X 座標	Y 座標	水平距離	方位角	機械点	後視準	標高
T1	−4731.319	−44314.902	T1 ～ T2 間　48.602 m				45.449 m
T2	−4683.501	−44323.602					
調査区基準点							
点名	X 座標	Y 座標	水平距離	方位角	機械点	後視準	標高
杭 1	−4731.778	−44282.118	32.787 m	90° 48′ 05″	T1	T2	
杭 2	−4747.141	−44302.468	20.123 m	141° 50′ 20″	T1	T2	
杭 3	−4756.117	−44296.166	31.080 m	142° 55′ 35″	T1	T2	
杭 4	−4759.951	−44311.494	28.835 m	173° 12′ 45″	T1	T2	
杭 5	−4696.373	−44235.034	58.910 m	53° 03′ 35″	杭 1	T1	45.768 m
杭 6	−4741.253	−44302.120	16.189 m	127° 51′ 00″	T1	T2	
杭 7	−4737.951	−44282.772	6.203 m	186° 02′ 55″	杭 1	T1	
杭 8	−4730.765	−44290.176	8.121 m	277° 09′ 50″	杭 1	T2	
杭 9	−4692.247	−44220.394	15.216 m	74° 15′ 40″	T1	杭 1	
杭 10	−4696.505	−44228.538	6.498 m	91° 10′ 00″	杭 5	杭 1	
杭 11	−4712.266	−44218.014	23.287 m	133° 02′ 20″	杭 5	杭 1	47.361 m
杭 12	−4703.396	−44206.942	14.187 m	51° 18′ 10″	杭 11	杭 5	46.948 m
杭 13	−4725.451	−44200.057	23.105 m	162° 39′ 50″	杭 12	杭 5	
杭 14	−4723.835	−44226.655	14.440 m	216° 45′ 30″	杭 11	杭 5	
杭 15	−4699.860	−44190.333	30.334 m	65° 51′ 30″	杭 11	杭 5	
杭 16	−4722.092	−44191.493	28.286 m	110° 16′ 00″	杭 11	杭 5	
杭 17	−4738.599	−44211.563	23.986 m	213° 06′ 33″	杭 16	杭 11	
杭 18	−4718.459	−44169.923	21.874 m	80° 26′ 25″	杭 16	杭 11	
杭 19	−4739.543	−44200.182	19.495 m	206° 28′ 05″	杭 16	杭 11	
杭 20	−4738.143	−44184.674	17.440 m	156° 58′ 55″	杭 16	杭 11	
杭 21	−4695.702	−44165.971	23.098 m	9° 51′ 05″	杭 18	杭 28	
杭 22	−4688.931	−44142.910	32.925 m	14° 09′ 35″	杭 28	杭 16	
杭 23	−4698.503	−44126.932	34.517 m	45° 16′ 10″	杭 28	杭 16	
杭 24	−4702.383	−44108.718	47.357 m	64° 28′ 25″	杭 28	杭 16	
杭 25	−4703.641	−44152.644	19.191 m	356° 26′ 35″	杭 28	杭 16	
杭 26	−4704.693	−44133.425	25.548 m	44° 52′ 55″	杭 28	杭 16	
杭 27	−4707.719	−44122.962	32.234 m	62° 06′ 55″	杭 28	杭 16	
杭 28	−4722.795	−44151.453	40.046 m	91° 00′ 20″	杭 16	杭 11	
杭 29	−4736.833	−44169.951	26.103 m	124° 23′ 00″	杭 16	杭 11	
杭 30	−4654.895	−44172.775	74.810 m	56° 19′ 40″	杭 5	杭 11	
杭 31	−4616.372	−44104.158	78.691 m	60° 41′ 20″	杭 30	杭 5	



第 5 図　川角古墳群地形測量図

第 2 節　測量調査の所見

(1)14 号墳(第 6・7 図、第 3 表)

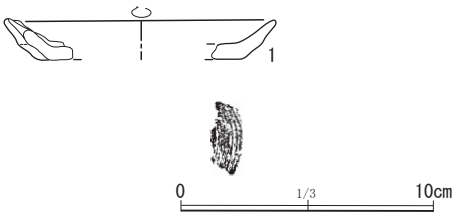
墳丘所見　14 号墳は標高 46.6 m付近に立地し、北側に崇徳寺跡、南西側には 16 号墳が位置する。墳丘は、長径 13.3 m、短径 9.1 m、高さ 2.0 mを測る。貼石は、墳頂部および墳丘南西斜面に認められ、石材は 10cm から 20cm 程度の河原石(チャート)である。また、墳頂部では 14cm から 22cm の緑泥片岩片 4 点を確認した。これらは貼石とは異なる石材であり厚さ 2cm 程度と薄く、板碑の厚さに類似することから、板碑が置かれていた可能性が考えられる。

墳丘は北側が削平されているほか、東および西側も等高線が直線的で貼石もほぼ残存しないことから、何らかの改変を受けているのと考えられる。

表採遺物　2016 年の測量調査の際に、かわらけ 1 点を表採した。口径は 11.2cm、底径は 8.0cm と推定される。右回転のロクロ成形で、底部は回転糸切り離しである。

口径と底径の大きさや、やや外側に開きながら立ち上がることから 15 世紀中ごろから後半のものと考えられる。

第 6 図　14 号墳測量図



第 7 図　14 号墳表採遺物

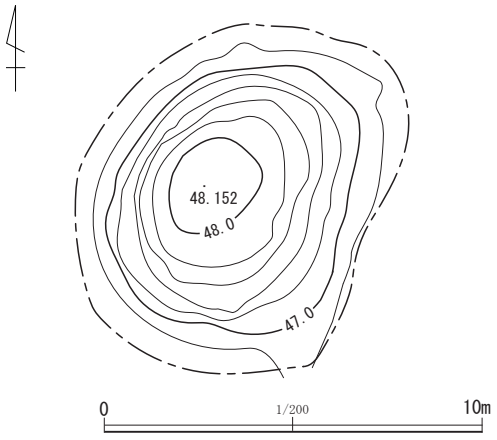
第 3 表　14 号墳表採遺物観察表

番号	種別	器種	法量(cm)	成形・整形等の特徴	含有物	色調
1	土器	かわらけ	口径：(11.2) 底径：(8.0) 器高：1.9	成形：右回転ロクロ 底部：回転糸切り離し	石英・長石・角閃石	10YR5/4 にぶい黄橙

(2)16 号墳(第 8 図)

墳丘所見　16 号墳は標高 46.6 m付近に立地し、北側に崇徳寺跡、西側に町道 4 号線、北東側に 14 号墳が位置する。墳丘は、長径 10.3 m、短径 7.6 m、高さ 1.5 m を測り、墳丘の南東斜面がやや崩落していることを確認した。貼石は、崩落が見られる墳丘南東側を除いて残存しており、石材は 10cm から 20cm 程度の河原石(チャート)である。

墳丘南東斜面以外は、大きな崩落が認められないため、築造当時の状態をある程度良好に保っていると考えられる。

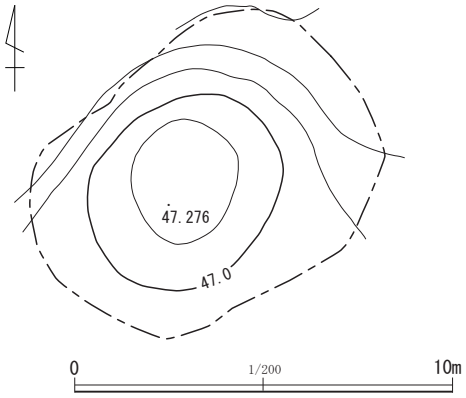


第 8 図　16 号墳測量図

(3)23 号墳(第 9 図)

墳丘所見　23 号墳は標高 46.4 m付近に立地し、南東側に 24 号墳、南側に 28 号墳が位置する。墳丘は、長径 9.6 m、短径 6.5 m、高さ 0.8 mを測る。貼石は、墳頂部北側から北西斜面にかけて認められ、石材は 10cm から 20cm 程度の河原石(チャート)である。また、墳頂部において緑泥片岩片が確認された。

23 号墳の北側は、地形が急激に傾斜した後に平坦面が形成されていることから、意図的に地形が改変されている可能性があり、墳丘北斜面もこの改変に伴って削平されたものと考えられる。



第 9 図　23 号墳測量図

23 号墳が低墳丘である点に関しては、2 つの可能性が考えられる。1 つは、23 号墳はもともと低墳丘であり築造当初の状態を保っているという可能性であり、もう 1 つは築造後に削平された結果、低墳丘となった可能性である。後者の事例として、近年の発掘調査によって当古墳群 39 号墳は、中世墓地として二次利用された可能性が指摘されており(毛呂山町教育委員会 2016)、23 号墳は中世の遺物は確認できなかったものの、低墳丘という点で 39 号墳と類似する 23 号墳は、後世の削平をうけた可能性を考慮する必要がある。

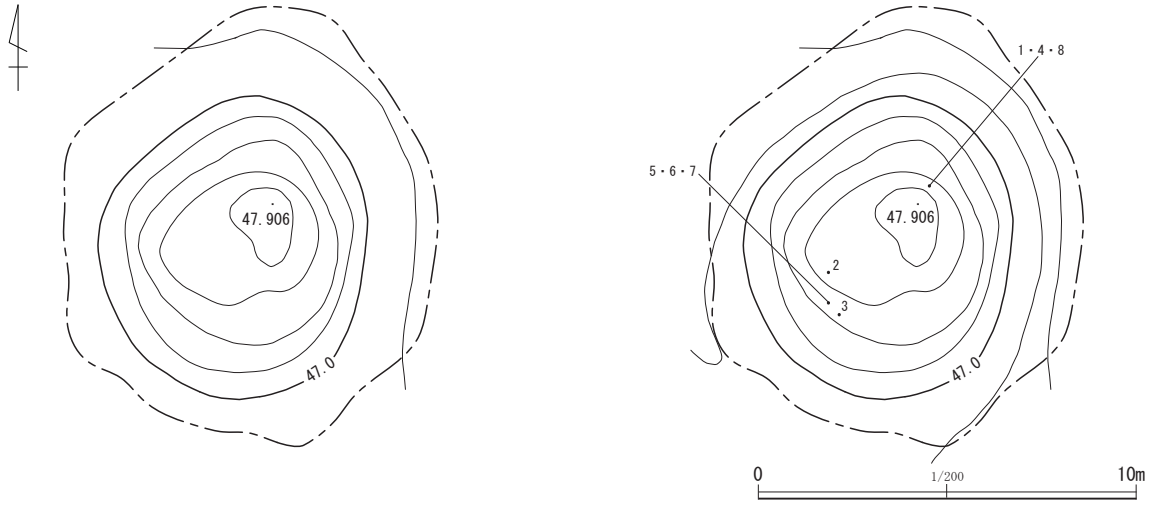
(4)24 号墳(第 10・11 図、第 4 表)

墳丘所見　24 号墳は標高 46.4 m付近に立地し、西側に 23 号墳、東側に 25 号墳、南西側に 28 号墳が位置する。墳丘は、長径 11.7 m、短径 10.0 m、高さ 1.4 mを測り、墳頂部西側にはなだらかに傾斜している。貼石は、墳丘西斜面から南西斜面にかけて散見されたほか南東斜面にも認められ、石材は 18cm から 20cm 程度の河原石(チャート)である。このほか、墳頂部において緑泥片岩片 1 点も確認された。また、墳頂部はややくぼみが認められ、埋葬施設が陥没した痕跡の可能性が考えられる。

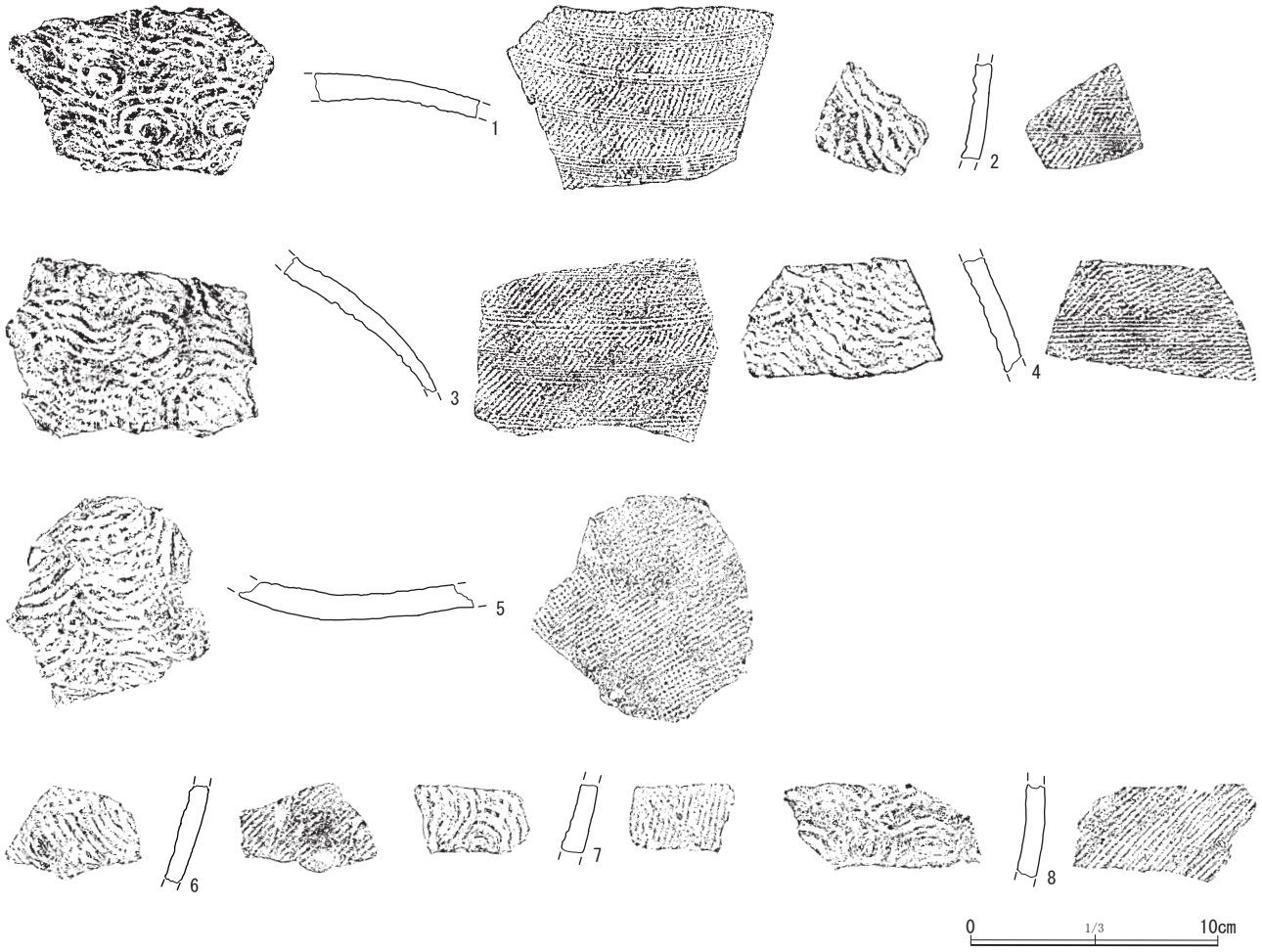
表採遺物　2021 年の測量調査の際に、墳丘北東斜面および西斜面の標高 47.6 m付近で須恵器甕片 9 点が表採された。今回表採された遺物は、原位置を保っている可能性もあるが、現場の所見から後世に集積された可能性も想定される。表採された遺物の詳細については第 4 章第 3 節にて報告するが、第 11 図 1 ～ 5 と 6 ～ 8 の少なくとも 2 個体に分けることができる。

1 ～ 5 の外面は、叩きの後にカキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。胎土には、南比企窯産の須恵器の特徴とされる海綿骨針化石が含まれることから、南比企窯産であると考えられる。

6 ～ 8 の外面には平行線文の叩き具痕が、内面には同心円文の当て具痕が残るが、6 の外面には部分的にナデが施される痕跡が残る。胎土には、海綿骨針化石が含まれることから、同様に南比企窯産と考えられる。



第 10 図　24 号墳測量図及び遺物表採位置



第 11 図　24 号墳採遺物

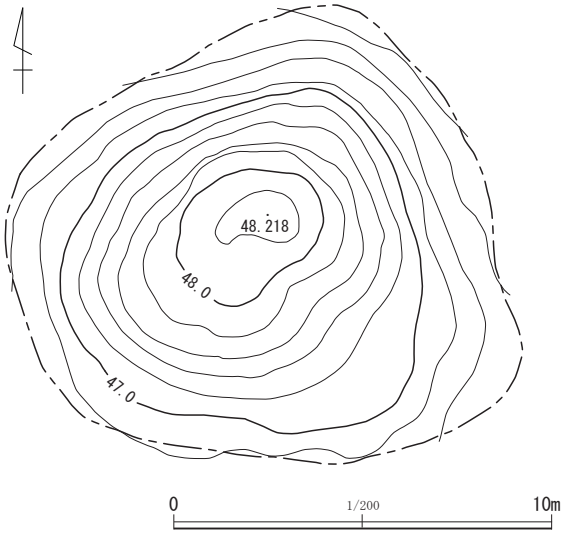
第 4 表　24 号墳表採遺物観察表

番号	種別	器種	成形・整形等の特徴	含有物	色調	備考
1	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・カキメ 内：同心円文当て具	長石・白色砂粒・海綿骨針化石	N4/　灰	南比企窯産
2	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・カキメ 内：同心円文当て具	長石・海綿骨針化石・石英・チャート	N4/　灰	1 と同一個体
3	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・カキメ 内：同心円文当て具	長石・海綿骨針化石・石英・チャート	N4/　灰	1 と同一個体
4	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・カキメ 内：同心円文当て具・ナデ	長石・海綿骨針化石・石英・チャート・凝灰岩	N3/　暗灰	1 と同一個体
5	須恵器	甕	外：平行線文叩き具 内：同心円文当て具	長石・海綿骨針化石・チャート	N5/　灰	1 と同一個体
6	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・ナデ 内：同心円文当て具	長石・チャート	7.5Y2/1 灰白	南比企窯産
7	須恵器	甕	外：平行線文叩き具 内：同心円文当て具	長石・チャート	7.5Y8/1 灰白	6 と同一個体
8	須恵器	甕	外：平行線文叩き具 内：同心円文当て具・ナデ	長石・海綿骨針化石・石英・チャート	7.5Y7/1 灰白	6 と同一個体

(5)25 号墳(第 12・13 図、第 5 表)

墳丘所見　25 号墳は、標高 46.6 m付近に立地し、西側に 24 号墳、北東側に 26 号墳、南側に 30 号墳が位置する。墳丘は、長径 13.3 m、短径 11.5 m、高さ 2.3 mを図り、墳頂部付近には平坦面が認められる。貼石は、墳頂部平坦面を中心として良好に残存しており、貼石は 11cm ～ 18cm 程度の河原石(チャート)である。墳丘の残存状態については、ほかの古墳と比べ良好であるが墳丘北斜面や南東斜面を中心に崩落が認められる。

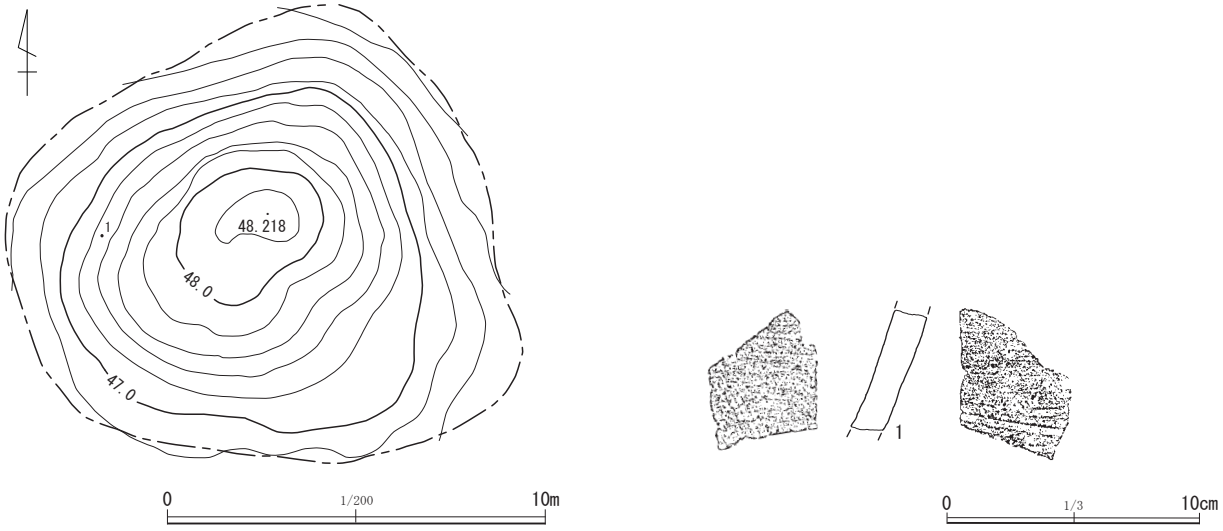
また、北側の墳丘裾付近には長辺 44cm の石材、墳頂平坦面の北端に長辺 45cm の石材が確認されたが、これらの石材は貼石の石材より大型のため石室石材の可能性がある。このため、埋葬施設は盗掘を受けている可能性が考えられる。



第 12 図　25 号墳測量図

表採遺物　2021 年の測量調査の際に、墳丘西側の標高 47.3 m付近で陶器片 1 点が表採された。

第 13 図 1 は、陶器の甕の胴部と考えられ、外面は木口状工具による横ナデ、内面には木口状工具による横ナデ後、斜方向のナデが施されている。生産地は常滑窯であると考えられる。



第 13 図　25 号墳遺物表採位置及び表採遺物

第 5 表　25 号墳表採遺物観察表

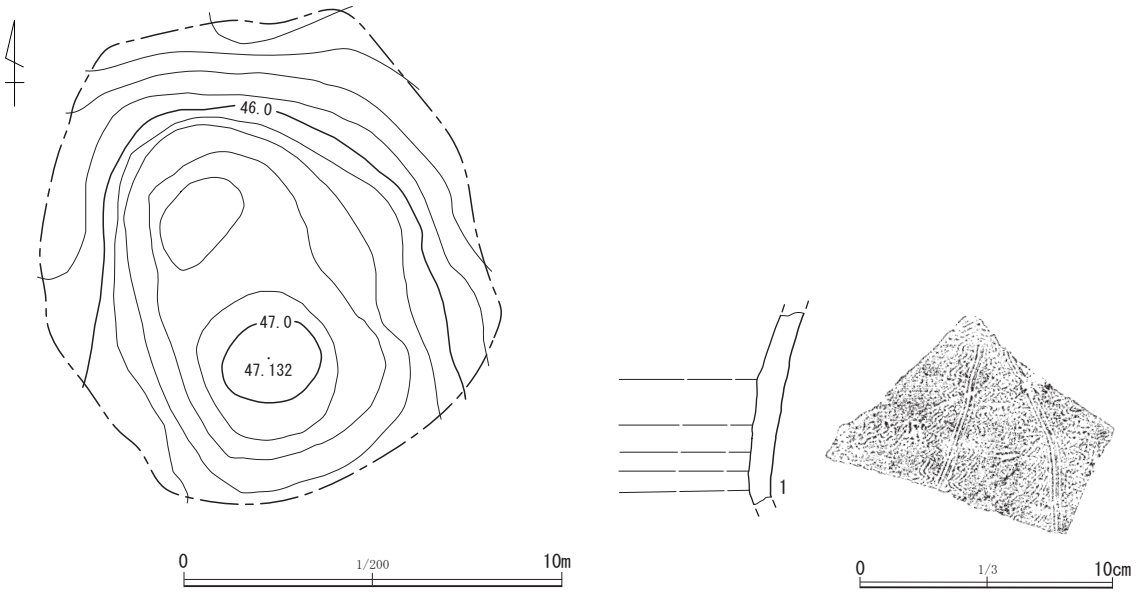
番号	種別	器種	成形・整形等の特徴	含有物	色調	備考
1	陶器	甕	外：木口状工具による横ナデ 内：木口状工具による横ナデ・斜方向のナデ	長石・凝灰岩	7.5R4/2 灰赤	常滑窯産

(6)26 号墳(第 14 図、第 6 表)

墳丘所見　26 号墳は標高 45.4 m付近に立地し、西側に 25 号墳、東側に 27 号墳が位置する。墳丘は、長径 13.0 m、短径 11.6 m、高さ 2.0 mを測る。貼石は、墳頂部および墳丘北斜面や東斜面に認められ、石材は 10 cmから 30 cmの河原石(チャート)である。墳丘の中央部分は、東西方向に凹んでいるため削平されたと考えられる。また、墳丘北側に長辺 40cm の石材が確認され、貼石の石材より大型であるため石室石材の可能性がある。

表採遺物　2016 年の測量調査の際に、墳丘から須恵器片 1 点が表採された。

第 14 図 1 は、須恵器甕の口縁部であり、外面の文様は横位の波状文と縦位の波状文・直線文という特徴的な文様構成である。胎土には、海綿骨針化石が含まれていることから南比企窯産であると考えられる。



第 14 図　26 号墳測量図及び表採遺物

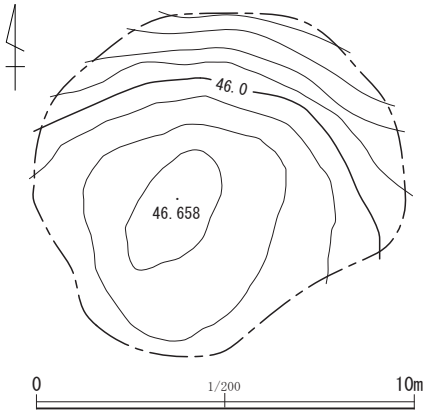
第 6 表　26 号墳表採遺物観察表

番号	種別	器種	成形・整形等の特徴	含有物	色調	備考
1	須恵器	甕	文様：横位の波状文、 縦位の波状文・直線文	長石・海綿骨針化石・ チャート	10YR5/3 にぶい黄褐	南比企窯産

(7)27 号墳(第 15 図)

墳丘所見　27 号墳は標高 45.2 ｍの地点に立地し、西側に 26 号墳が位置する。

墳丘は、長径 9.8 ｍ、短径 8.3 ｍ、高さ 1.5 ｍを測る。貼石は、墳頂部と北側斜面に点在しており、石材は 10 ㎝から 25 ㎝程度の河原石(チャート)である。27 号墳の北側の標高は南側と比べて 1.2 ｍ低くなるが、北側の墳丘裾部付近で確認された貼石は原位置を保っている可能性があるため、後世に地形が改変された可能性は低いと考えられる。

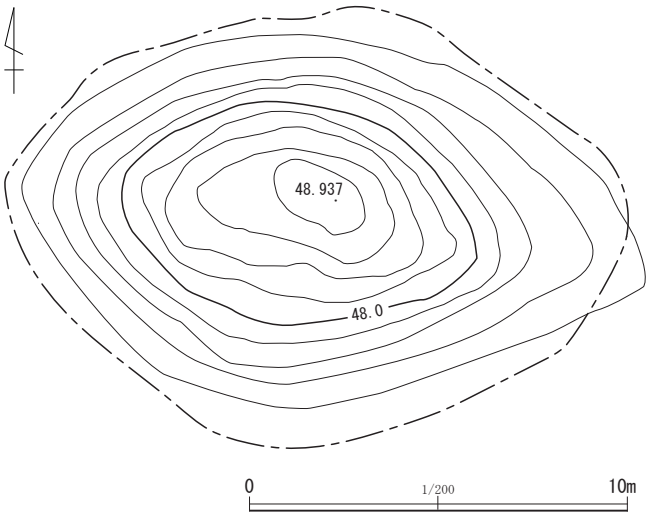


第 15 図　27 号墳測量図

(8)28 号墳(第 16・17 図、第 7 表)

墳丘所見　28 号墳は標高約 47.2 ｍ付近に立地し、北側に 23 号墳、北東側に 24 号墳が位置する。

墳丘は、長径 15.8 ｍ、短径 11.5 ｍ、高さ 1.9 ｍを測る。貼石は、墳丘北側に墳頂から 2 ｍ程度の範囲で確認され、石材は 10㎝～20㎝程度の河原石(チャート)である。墳丘の崩落は、北西斜面と南東斜面において確認された。

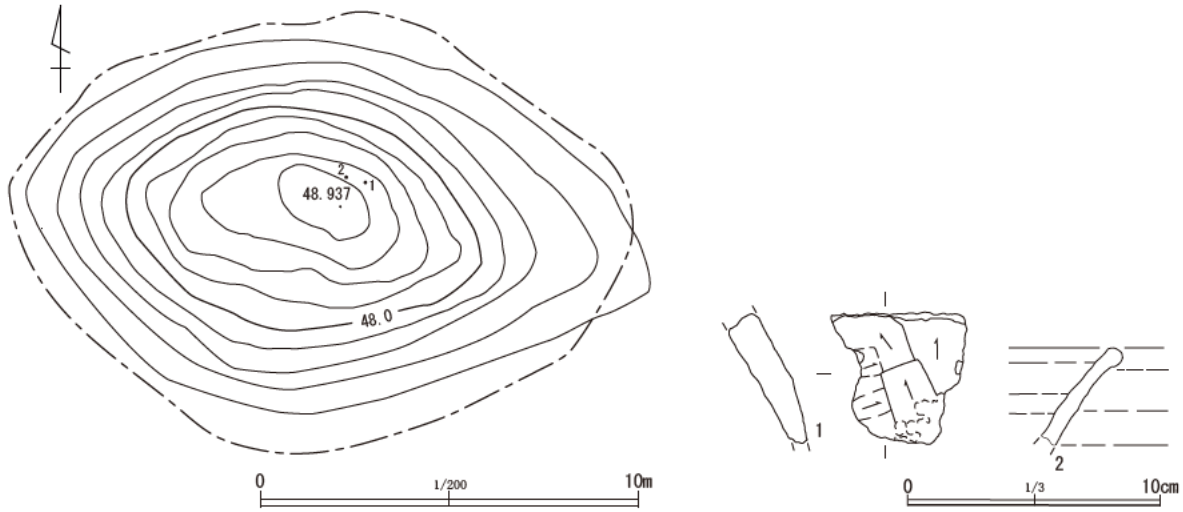


第 16 図　28 号墳測量図

表採遺物　2021 年の測量調査の際に、土師器甕片 1 点、陶器片口鉢片 1 点が墳頂部東側の標高 48.7 ｍ付近で表採された。

第 17 図 1 は、土師器甕の胴部であり、外面には縦方向のヘラ削りの後ナデが施され、一部器表面が剥離している。内面は、摩耗のため調整が不明である。胎土には、海綿骨針化石を含むことから岩殿丘陵周辺で生産されたものと考えられる。

第 17 図 2 は、陶器片口鉢の口縁部である。口唇部は肥厚し、右回転のロクロ成形である。生産地は、常滑窯と考えられる。



第 17 図　28 号墳遺物表採位置及び表採遺物

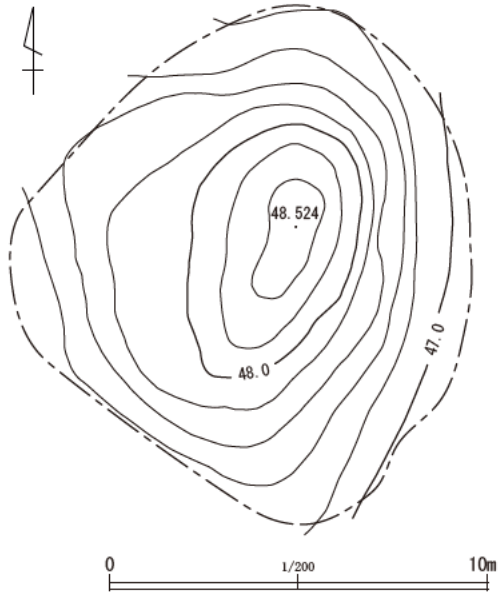
第 7 表　28 号墳表採遺物観察表

番号	種別	器種	成形・整形等の特徴	含有物	色調	備考
1	土師器	甕	外：縦方向のヘラケズリ後横方向のナデ	石英・長石・海綿骨針化石・チャート	7.5YR5/8 明褐	内面摩耗
2	陶器	片口鉢	成形：右回転ロクロ	長石・石英・チャート	5Y6/1 灰	常滑窯産

(9)29 号墳(第 18 図)

墳丘所見　29 号墳は標高 47.0 m付近に立地し、北側に 24 号墳、北西側に 28 号墳、東側に 30 号墳が位置する。墳丘は、長径 13.9 m、短径 11.5 m、高さ 1.6 mを測る。貼石は、墳頂部東側で弧状に認められ、石材は 10cm から 20cm の河原石(チャート)である。

墳丘は、東側斜面が直線的になっているため削平された可能性がある。また、墳丘北西斜面が約 8 mにわたって突出するように流出しているほか、墳頂部の南西側が一段低くなっているため、南西方向にも崩落しているものと考えられる。

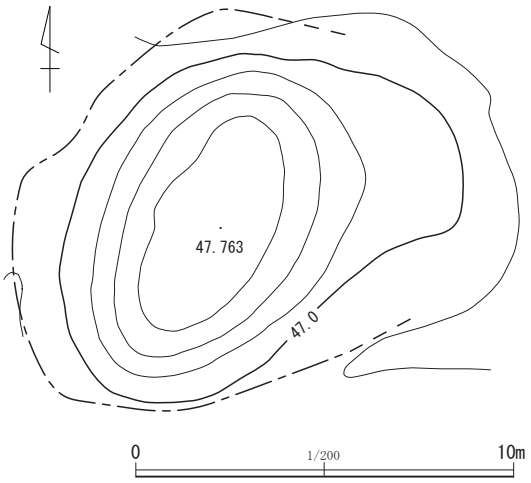


第 18 図　29 号墳測量図

(10)30 号墳(第 19 図)

墳丘所見　30 号墳は標高 46.6 m付近に立地し、北西側に 24 号墳、北側に 25 号墳が位置する。墳丘は、長径 15.5 m、短径 10.8 m、高さ 1.2 mを測る。貼石は、墳丘東斜面と南西斜面で認められ、石材は 10cm から 20cm 程度の河原石(チャート)である。

墳丘東側は、47.0 mから 46.6 m付近で等高線が大きく乱れることから、崩落していると考えられる。また、現状の墳丘形状が南北方向の楕円形を呈しているため、南北方向にも崩落している可能性がある。以上の点から、墳丘東斜面と南西斜面に認められた貼石は、原位置を保っているかどうか疑問が残る。



第 19 図　30 号墳測量図

(11)遺構外表採遺物(第 20 図、第 8 表)

2016 年の測量調査の際に、古墳以外の場所で近世瓦 1 点、須恵器 2 点が表採され、そのうち須恵器 1 点を図示した。

第 20 図 1 は、須恵器甕の胴部であり、外面は叩き後カキ目を施し、内面にも一部ナデが施されている。胎土に海綿骨針化石を含むことから、南比企窯産と考えられる。

第 20 図　遺構外表採遺物

第 8 表　遺構外表採遺物観察表

番号	種別	器種	成形・整形等の特徴	含有物	色調	備考
1	須恵器	甕	外：平行線文叩き具・カキメ 内：同心円文当て具・ナデ	長石・白色砂粒	N4/　灰	南比企窯産

第 3 節　川角古墳群表採遺物にかんする所見

川角古墳群は、越辺川右岸の毛呂台地北東部に立地する古墳群であり、これまでの発掘調査では埴輪は出土しておらず横穴式石室の形態なども勘案すると、古墳時代終末期の群集墳と判断してよい。これまで駒澤大学では、10 基(川角 14・16・23～30 号墳)の古墳について測量調査を実施しており、そのうち 5 基(川角 14・24～26・28)の墳丘から遺物が表採されたため、簡単ではあるが須恵器を中心に所見を記したい。

(1)表採遺物の概要(第 21 図)

川角 24 号墳　川角 24 号墳では、今回のなかではもっとも多い 9 点の須恵器が表採され、そのうち 8 点を図示した。これらの須恵器は、口縁部は認められずいずれも胴部片であるが甕の可能性が高い。表採された須恵器は、胎土・焼成・叩き具・当て具・調整などの観点から、①(第 11 図 1 ～ 5)と、②(第 11 図 6 ～ 8)の少なくとも 2 個体に分けることができる。①は、胴部外面に平行線文の叩き具、内面に同心円文の当て具を使用する中型甕である。また、外面にはカキ目を施すのが特徴で、胎土中に海綿骨針化石を含むことから南比企窯産と考えられる。②は、①と焼成が異なり灰白色に発色するため別個体の中型甕と考えられる。外面は平行線文の叩き具、内面は同心円文の当て具を使用し、胎

土中に含有量は少ないが海綿骨針化石が認められるため、この個体も南比企窯産と考えられる。

これらの須恵器は、胴部の破片のため時期の特定は困難であるが南比企窯では 8 世紀以降、甕に使用される当て具は無文が主体となるため、24 号墳に伴うと考えて差し支えない。

川角 26 号墳　川角 26 号墳からも、2016 年の測量調査の際に須恵器中型甕の口縁部片(第 21 図 1)が表採されており、胎土中に海綿骨針化石が含まれることから南比企窯産と考えられる。この甕は、文様構成に大きな特徴が認められ、横位の波状文に加え縦位の波状文と 3 条一単位の直線文を施文しており、直線文の施文工具は波状文のものと同一と考えられる。

このような文様構成は、古墳時代に限らず須恵器甕の文様としては珍しく南比企窯跡群からの出土も認められないが、類例として川角 15 号墳から出土した 2 点の須恵器甕(第 21 図 2・3)があげられる(毛呂山町教育委員会 2014)。この甕は口縁部に、上位から縦位の波状文と縦位の直線文－横位の波状文－直線文－横位の波状文－ 1 条沈線が施されており、川角 26 号墳の事例と文様構成が類似する[註 1)]。なお、波状文が一部三角形状になるもの特徴である。また、胴部外面にも上位から横位の波状文－ 2 条沈線－縦位の波状文が施文されており、さらに外面には叩き具痕は認められず木口状工具による調整が施されているのも大きな特徴である。

川角 26 号墳で表採された須恵器甕についても、破片であり時期の特定は困難であるが類似した文様構成の須恵器甕が川角 15 号墳の発掘調査においても出土している点から、川角 26 号墳に伴うと判断できる。

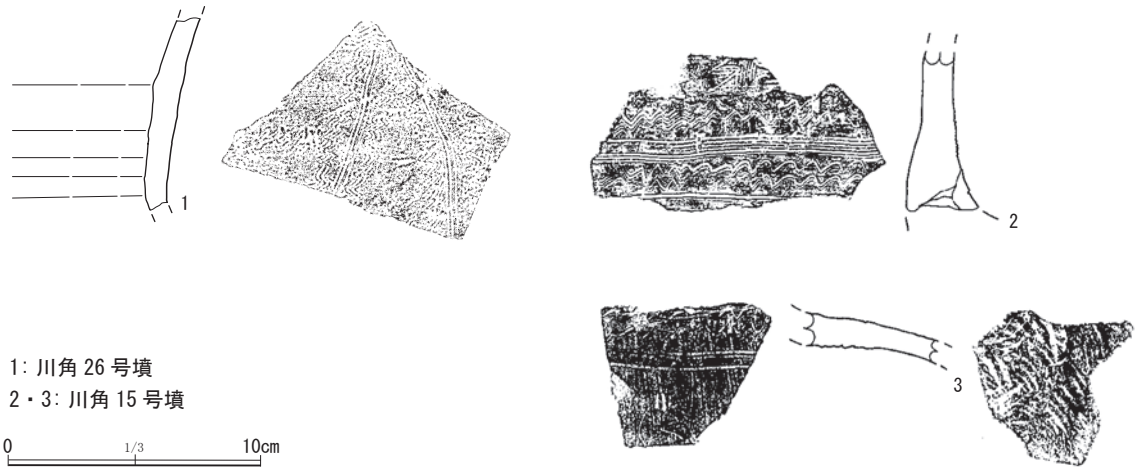
須恵器以外の表採遺物　上記の須恵器以外に、川角 14 号墳でかわらけ、川角 25・28 号墳で陶器が墳丘で表採されている。川角 14 号墳は、中世の墓域である崇徳寺跡の範囲に近接し、川角 25・28 号墳の北側には鎌倉街道沿いの宿である堂山下遺跡が展開している。また、川角 15 号墳の発掘調査では墳頂付近から康永元年(1342)銘板碑や、北側墳裾から中世の陶器類が集中して出土しており、川角 18 号墳や川角 40 号墳からも中世の陶器類の出土が確認されている(毛呂山町教育委員会 2014・2016)。このため、川角 14・25・28 号墳においても中世に何らかの形で古墳が利用されていた可能性が考えられるが、測量調査だけではどのような利用形態であったか明らかにしえない。

(2)まとめ

以上、5 基の古墳から表採された遺物について所見を記したが、古墳に伴う土器は川角 24・26 号墳の須恵器中型甕と考えられ、いずれも越辺川左岸の岩殿丘陵に展開する南比企窯跡群で生産されたものである。また、破片のため須恵器の時期を特定することはできないが埴輪が表採されていない点からも、古墳時代終末期に位置づけてよいと考えられる。表採資料のため詳細に言及できないが、川角 24 号墳では葬送儀礼の際に少なくとも 2 個体の須恵器中型甕を墳頂に配置、川角 26 号墳でも同様に 1 個体の須恵器中型甕が墳頂に配置されていた可能性が考えられる。

註

(1)資料の実見にあたり、毛呂山町教育委員会ならびに植田雄己氏から多大なるご配慮を賜わりました。



第 21 図　26 号墳表採須恵器と関連資料

第5章　総括

2016年から7回にわたる測量調査によって、川角14・16・23～30号墳の情報を得ることができた。本章では、ここまでの記述をもとに、駒澤大学が行った川角古墳群の測量成果をまとめる。

墳丘　今回の測量調査では川角14・16・23～30号墳のいずれの古墳も、削平や著しい崩落が認められる墳丘も含むものの、円墳である可能性が高いことが認められた。古墳の状態については、14・23・26号墳において削平が、25・28～30号墳において崩落がそれぞれ認められた。16・27号墳については、貼石起源とみられる石材が露出しており、等高線図からも墳丘の改変などの痕跡が特に認められないことから、築造当初の状態をある程度良好にとどめているものであると考えられる。14・23・26号墳の削平の要因は、川角古墳群に近接して中世の宿場である堂山下遺跡や、同じく中世の墓域であり寺域内で川角22号墳を削平していることが確認された崇徳寺跡が位置する。そのため、中世における川角古墳群周辺の土地利用に伴うものであることが想定されるが、今回の調査は測量のみであるため確証はない。

今回、調査対象とした古墳のうち、最小径の古墳は長径9.5ｍを測る23号墳であり、最大径の古墳は長径15.8ｍを測る28号墳である。また墳丘の高さにかんしては、一番低い古墳は高さ0.8ｍを測る23号墳であり、一番高い古墳は高さ2.3ｍを測る25号墳である。今回の調査では周溝を確認はできていないため、古墳の規模に関する詳細な情報は今後の調査が待たれるものの、調査対象とした古墳はいずれも直径10～15ｍ程度の規模が想定される。

23～30号墳については、周辺地形が北西方向に向かって緩やかに下ることを考慮すると、23～27号墳と28～30号墳がそれぞれ同程度の標高を意識して築造された墳丘であると考えられる。また古墳の規模に着目すると、直径10ｍ・高さ1.5ｍ程度のグループと直径13ｍ・高さ2.0ｍ程度のグループに分けることができると思われる一方で、古墳の規模と築造場所の関係性については見出すことができなかった。

表採遺物　今回の調査で表採された遺物のうち、川角古墳群に伴うと考えられるものは、24・26号墳で表採された須恵器である。表採された土器はいずれも破片であり年代を特定することは難しい。一方で、埴輪が認められなかったことは、既往の調査における見解と同様に、川角古墳群の築造は7世紀代が中心であったことを示している。須恵器に関しては、詳細は第4章第3節を参照されたいが、胎土に海綿骨針化石を含むことから南比企窯産と考えられる。

上述した土器のほかに、14・25・28号墳では、かわらけや常滑窯産と考えられる陶器が表採された。14・23号墳では墳丘が改変されていることが認められるため、近接する崇徳寺跡や堂山下遺跡などとともに中世における川角古墳群一帯の利用について検討材料となるものと思われる。

今後の課題　川角古墳群の調査は、発掘調査が行われた6・15・18・39・40号墳と、今回測量調査を行った14・16・23～30号墳以外の古墳は、1988年に毛呂山町教育委員会によって報告された1～38号墳の分布確認調査で確認されたほかは調査がなされていないのが現状である。

川角古墳群が立地する越辺川周辺には、川角古墳群の前段階に位置付けられている苦林古墳群や宿浦1号墳のほか、小用廃寺との関わりが指摘されている西戸古墳群も存在する。またさらに範囲を広げると、毛呂山町の北に位置する鳩山町では十郎横穴墓群のほか、坂戸市勝呂廃寺や武蔵国分寺に瓦を供給していたことで知られる赤沼古代窯跡が存在する。一方で、これらの終末期群集墳や古墳時代

の集落遺跡については不明確な点が多く、今後の調査の進展が待たれる。

今回の調査では測量のみであったために、周溝の確認などの古墳の正確な規模や構造についての情報は得ることができなかった。遺物にかんしても表採であるために、川角古墳群築造時期の根拠とはならない。また 14・23 号墳で確認された削平や 25・28～30 号墳で確認された崩落についても、その詳細な情報を得ることができていない状態である。

このため、川角古墳群内において未調査の古墳の調査を行う必要があるとともに、今回測量調査を行った 14・16・23～30 号墳についても確認調査によってより正確な情報を得ることが今後の課題として残されている。

参考文献

愛知県史編さん委員会　2012『愛知県史　別編　窯業 3　中世・近世　常滑系』愛知県

埼玉県　1986『新編埼玉県史』別編 3　自然

財団法人　埼玉埋蔵文化財調査事業団　1991『堂山下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 99 集

財団法人　埼玉埋蔵文化財調査事業団　2010『銭塚Ⅱ / 城敷Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 369 集

坂戸市教育委員会　2013『長岡遺跡 1 －長岡遺跡 12 区発掘調査報告書－』

坂戸市教育委員会　2015『新山古墳群 3 区』

塩野博　2004『埼玉の古墳　北足立・入間』さきたま出版会

城西大学学術調査室　1987『吹上：吹上古墳発掘調査報告』城西大学入間地区学術調査報告第 1 号　城西大学

鳩山町教育委員会　2008『町内遺跡Ⅷ－城添遺跡発掘調査報告書－』鳩山町埋蔵文化財調査報告第 32 集

鳩山町教育委員会　2012『町内遺跡 11』鳩山町埋蔵文化財調査報告第 39 集

鳩山町史編集委員会　2006『鳩山町史 1　鳩山の歴史　上』鳩山町

田中一郎　1960「毛呂山町 78 号古墳の調査概報」『考古学雑誌』第 46 巻第 1 号　日本考古学会

中世を歩く会　2002『在地土器検討会－北武蔵のカワラケ－記録集』

毛呂山町教育委員会　1985『大寺廃寺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 2 集

毛呂山町教育委員会　1988『毛呂山町の遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 5 集

毛呂山町教育委員会　1989『はるかな毛呂山－郷土の歴史を学ぼう（Ⅰ）－』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 6 集

毛呂山町教育委員会　1998『大類古墳群　第 2 次調査』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 18 集

毛呂山町教育委員会　1998『松の外遺跡・西戸古墳群～第 2 次・第 3 次発掘調査報告書～』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 17 集

毛呂山町教育委員会　2000『町内遺跡発掘調査報告(5)築地遺跡～第 1 次・第 2 次・第 3 次・第 4 次発掘調査～』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 20 集

毛呂山町教育委員会　2001『堂山下遺跡(範囲確認調査・発掘調査)鎌倉街道 B 遺跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 21 集

毛呂山町教育委員会　2012『宿浦遺跡　大類古墳群・大類氏館跡』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 27 集

毛呂山町教育委員会　2014『川角古墳群・崇徳寺跡－第 1 次発掘調査報告－』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 29 集

毛呂山町教育委員会　2016『町内遺跡発掘調査報告書(8)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 30 集

毛呂山町教育委員会　2017『町内遺跡発掘調査報告書(9)毛呂山町指定史跡崇徳寺跡確認調査』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 31 集

毛呂山町教育委員会　2021『町内遺跡発掘調査報告書(12)』毛呂山町埋蔵文化財調査報告第 34 集

写　真　図　版

1. 調査範囲遠景（南東から）

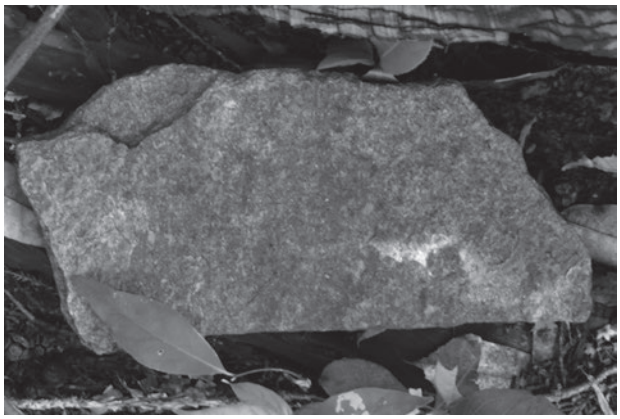
PL. 2

1. 14 号墳(右)・16 号墳(左)(南から)

2. 25 号墳(奥)・26 号墳(中央)・27 号墳(手前)

1. 14 号墳全景(北から)

2. 14 号墳墳丘南東斜面(南東から)



3. 14 号墳墳頂部緑泥片岩確認状況(東から)

4. 16 号墳全景(東から)

5. 16 号墳墳丘北斜面(北から)

6. 23 号墳全景(南から)

7. 23 号墳墳丘北斜面(北西から)

8. 作業風景

PL. 4

1. 24 号墳全景(北西から)

2. 24 号墳墳丘南西斜面(西から)

3. 24 号墳墳丘南西斜面(南西から)

4. 25 号墳全景(東から)

5. 25 号墳墳頂部貼石確認状況(西から)

6. 26 号墳全景(西から)

7. 26 号墳墳頂部貼石確認状況(北から)

8. 作業風景

1. 27 号墳全景(東から)

2. 27 号墳墳丘北斜面(北から)

3. 28 号墳全景(南から)

4. 28 号墳墳頂部貼石確認状況(東から)

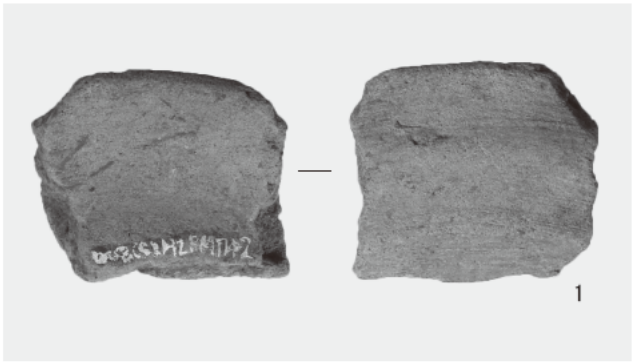
5. 29 号墳全景(北から)

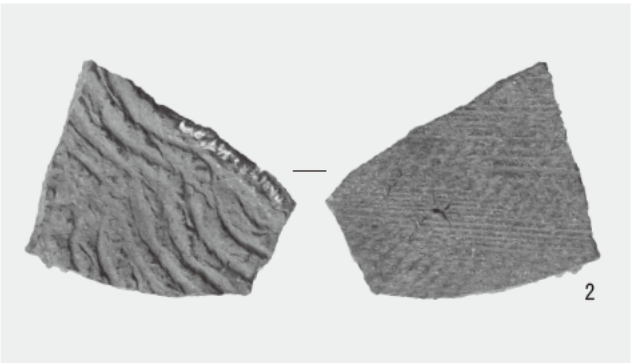
6. 29 号墳墳頂部貼石確認状況(北から)

7. 30 号墳全景(北東から)

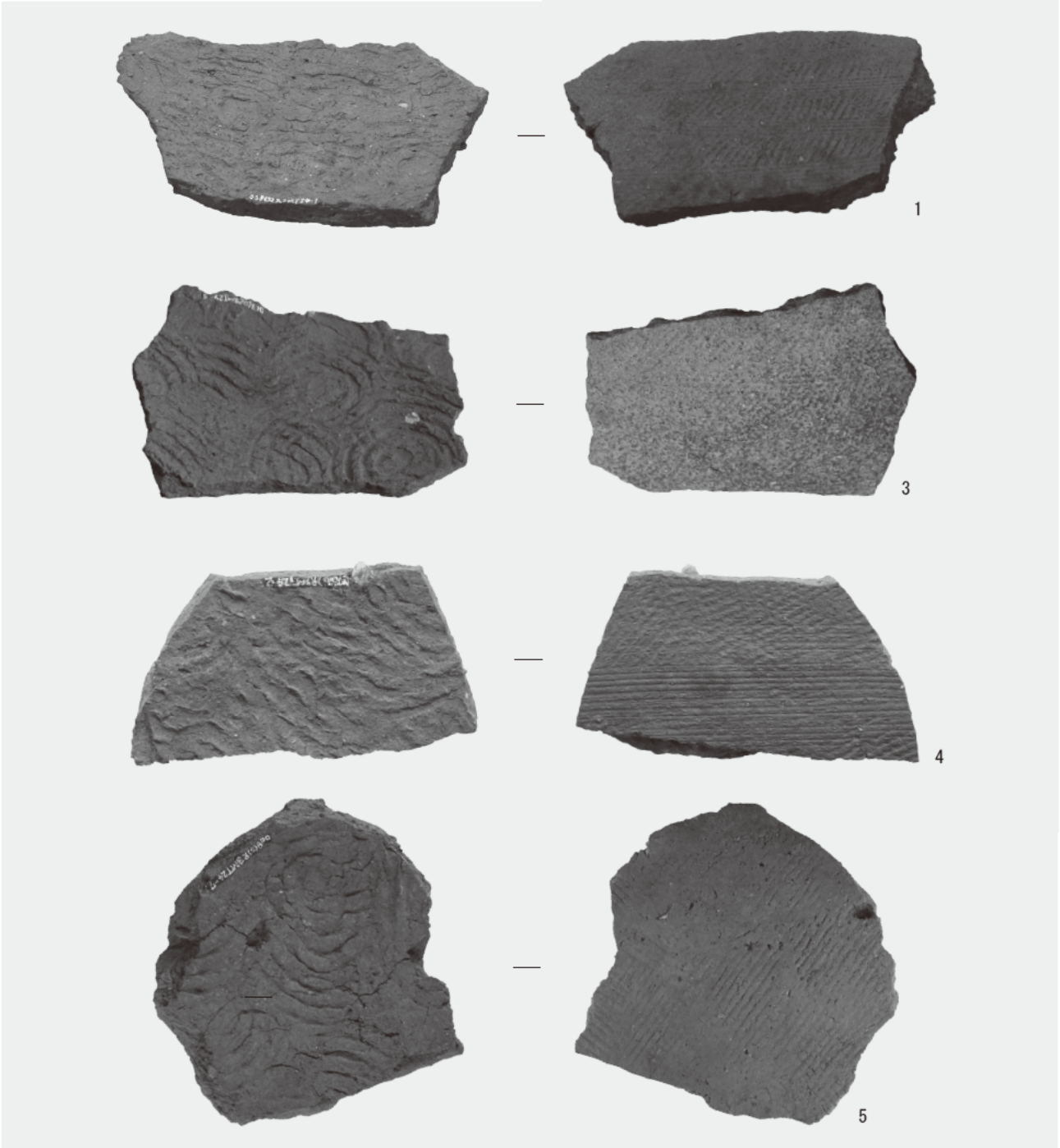
8. 30 号墳墳丘南西斜面(西から)

PL. 6

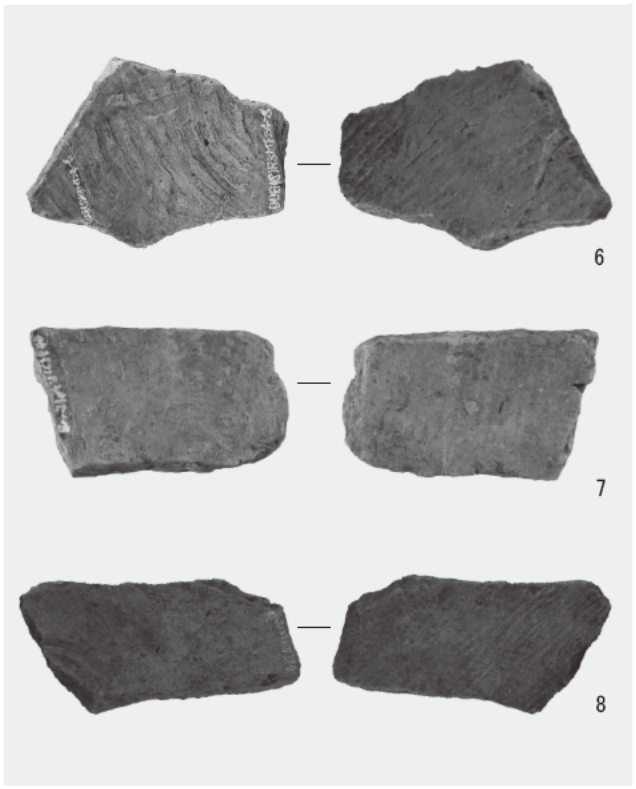




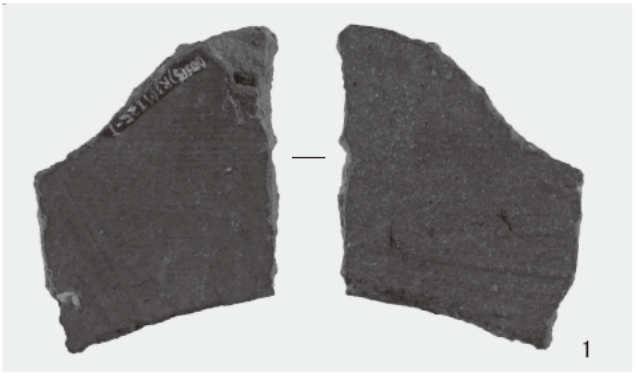
1. 14 号墳



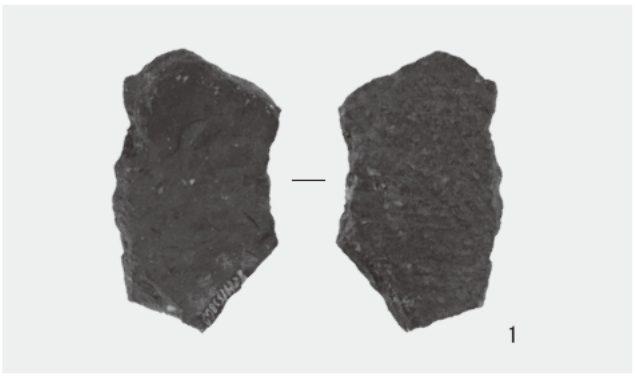
2. 24 号墳(1)



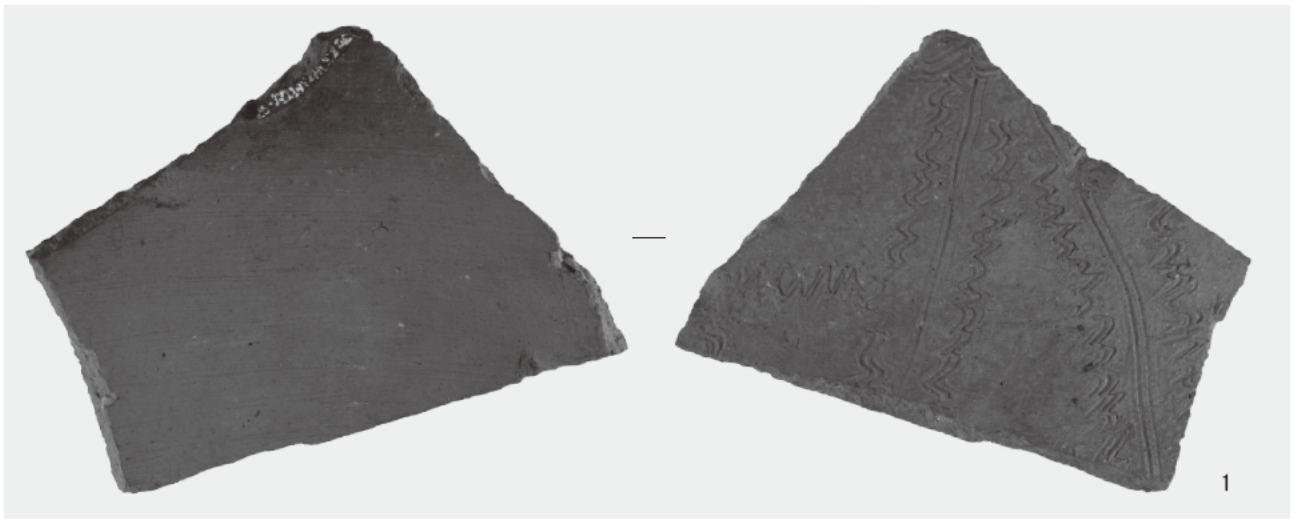
1. 24 号墳(2)



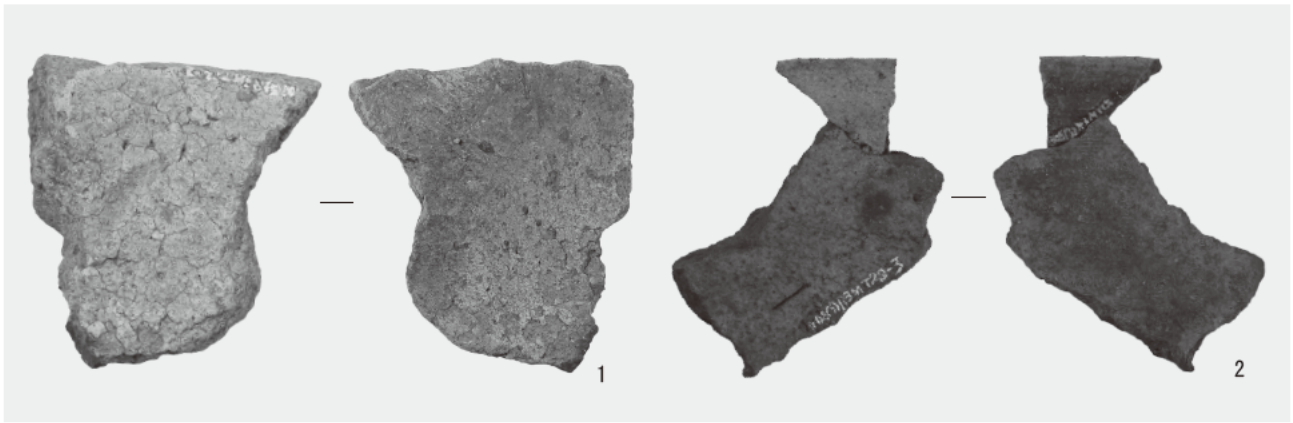
2. 25 号墳



3. 遺構外



4. 26 号墳



5. 28 号墳

報告書抄録

ふりがな	かわかどこふんぐんそくりょうちょうさほうこくしょ
報告書名	川角古墳群測量調査報告書
副書名	―14・16・23～30号墳―
編集著者名	寺前直人、角道亮介、藤野一之、間優人、金子健人、寺西良騎、野島大和、 吉田公太郎、春日優希、神田華絵、谷山優奈、ピエトラシキエヴィチレナ、 松尾もも、森崎祐以、米原光咲
編集機関	駒澤大学考古学研究室
所在地	〒154-8525 東京都世田谷区駒沢1-23-1 駒澤大学第1研究館1423 駒澤大学考古学研究室 電話03-3418-9281
発行年月日	2022年7月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経	
かわかどこふんぐん 川角古墳群	さいたまけんいるまぐん 埼玉県入間郡 もろやままち 毛呂山町 おおあざかわかど 大字川角	11326	26-008	35° 95′ 66″	139° 34′ 33″	学術目的
調査期間	20160809～20160821　20170302～20170310　20170808～20170820　20180306～20180310 20180814～20180823　20210706～20210711　20211005～20211010					

種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物
古墳	古墳	古墳　10基	須恵器・土師器・陶器・かわらけ

埼玉県入間郡毛呂山町

川角古墳群測量調査報告書

― 14・16・23～30 号墳 ―

2022 年 7 月 13 日　印刷
2022 年 7 月 19 日　発行

編集・発行　駒澤大学考古学研究室
印刷　気生堂印刷所
〒143-0015
東京都大田区大森西４丁目６-13